

## IX 所員の活動

### 2. 研究活動の概要・研究経過

中国の前近代（日本の江戸時代にあたる時期）におけるものの見方、考え方を、比較思想の視点から探ってきた。具体的には、1) 清代禁書 2) 中西文化交流に焦点を絞って研究を進めている。

- 1) 18世紀後半の乾隆禁書が大部分16・17世紀の著作を対象としている事実に注目し、明末清初の奔放な精神が、いかに育まれ、開花し、そして満人王朝の下でいかに抑え込まれて行ったかを、同時代の日本やヨーロッパの状況も視野に入れつつ総合的に考察している。紀要に連載中の論文「乾隆禁書」では、禁書を出来るだけ網羅的に読む作業を続けることによって、著作内容が思想的にも空間的にもいかなる広がりを見せていたかを明らかにしようとする。次いで文字獄との関係、並びに清代社会における思想の枠組みを分析し、清代禁書の構造的解明を進めつつある。
- 2) ヨーロッパの一方的な接近によって16世紀前半に始まった中国と西洋の交渉が、19世紀に至るまでの両文化圏の文化変容・伝播にいかなる足跡を残したかを、欧文資料と漢籍の双方から検証し、それによって中国の比較思想を概観しようとしている。

論文「中国とヨーロッパ」では、双方の出合いの現場における相互認識を通して、文化に対する両者の基本的姿勢の違いを論じた。特に中国では満人と漢人のあつれきが、知的活動の屏息、対外情報の空白を招いたことを示した。論文「徐光啓と夷狄——中国の比較思想」は、「西夷」から「西学」を導入し「遠夷」（満州族）に対抗しようとした中国比較思想の先駆者を追った評伝である。本年は、比較の視点から清代伝統社会の変容を考えるとともに、中国におけるイエズ会の活動について論じる予定である。

研究協力としては、1969年 (No.8) 以来寄稿しているフランスの中国文献紹介誌 (*Revue Bibliographique de Sinologie*) に対し、思想・歴史分野での書評分担を継続する。

文献センターにおける研究活動としては、学内外の専門家の協力を得て、コンパクトで汎用性の高い「現代中国書データベース」の作成を進めてい

るほか、本センターが毎年実施する「漢籍整理長期研修」のために「漢籍整理参考資料」の再編を準備している。

3. 教育活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

東京大学大学院人文科学研究科中国語中国文学 中国文学演習 1992・93年度；中国哲学 中国哲学特殊研究 1992・93年度，東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化 比較文明演習 1992年度，比較文化思想演習 1993年度。

5. 学外活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

比較思想学会，日仏東洋学会 (監事)，東大中国学会 (評議員)。

6. 過去の主要業績 (1992. 3 まで)

「清代禁書 — その著者たちの思考(上)(下)」『東文研紀要』73, 112 1977, 1990年；「明清思想 対西欧文化輸入的認識特点」『湘南大学学报』14-1 1987年；「気 — 中西思想交流の一争点」『東洋文化』67 1987年；「中国人の比較思想 — 《口鐸日抄》の対話から」『東文研紀要』117 1992年。

7. 過去2年間 (1992. 4 ~ 1994. 3) の研究業績

「徐光啓と夷狄」『異文化を生きた人たち』中央公論社 1993年；「中国とヨーロッパ」『地域システム』東京大学出版会 1993年；「中国比較文化的特色」『中国典籍與文化』江蘇古籍出版社 1993年；「乾隆禁書(二) — 著者たちのプロフィール(続)」『東文研紀要』124 1994年；「アジアの中の日本史」(書評)『エコノミスト』1994年；中国研究文献紹介 n. 106, 107, 339. *Revue Bibliographique de Sinologie* X, 1993.

## 東アジア部門 (第一)

濱下 武志 はました たけし

1. 略 歴

1943. 11生，1972 東大・文・東洋史卒，1974 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了，同年 同博士課程入学，1977 東洋文庫奨励研究員 (1979

## IX 所員の活動

まで), 1978 東大大学院博士課程退学, 同年 香港大センター・オブ・エイジアン・スタディーズにパートタイム・リサーチ・アシスタント (1979 まで), 1979 一橋大経済学部専任講師, 1981 同助教授, 1982 東文研助教授, 1988 同教授。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

東南アジア華人と中国華南との歴史的な結びつきを, 香港に焦点を当てて研究・調査を行っている。その内容は, 華僑送金のメカニズムと, 華南・東南アジア間の商業ネットワークを明らかにすることである。香港においては, 貿易・貿易金融の検討に加え19世紀後半の土地改革, 商業組織, 外国銀行, 地域組織などを調査している。1997年の返還後も見通すような研究を行いたいと考えている。

### 3. 教育活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻 中国近代経済史 1992・93 年度。

### 4. 学内行政事務分担 (1992. 4 ~ 1994. 3)

人文科学研究科委員会 (1993年4月 ~ )。

### 5. 学外活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

社会経済史学会 (理事・編集委員), アジア政経学会 (編集委員), ユネスコ日本 編集委員, 沖縄県教育委員会『歴代宝案』編集委員。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3 まで)

「近代中国における貿易金融の一考察」『東洋学報』78-3・4 1978年; 『中国近代経済史関係解説つき文献目録』1980年; 「世界資本主義とアジア民族資本」『社会経済史学の課題と展望』1984年; 『中国近代経済史研究——清末海関財政と開港場市場圏』東文研報告 1989年; 『近代中国の国際的契機』1990年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4 ~ 1994. 3) の研究業績

『近代中国研究案内』(共著) 岩波書店 1993年; 「東アジアにおける「ひと」の移動と琉球」『琉中関係論文集』(第二回琉中歴史関係国際学術会議)

1993年；「海域史研究と琉球の位置」『琉中関係論文集』（第四回琉中歴史関係国際学術会議）1993年3月；「東アジアの朝貢貿易と琉球大交易時代」『南海の王国琉球の世紀』角川書店 1993年；「朝貢と条約——東アジア開港場をめぐる交渉の時代1834-94」『アジアから考える〔3〕周縁からの歴史』東京大学出版会 1994年；「日本研究とアジア・アイデンティティ」（書評）『思想』830 1993年。

黨 武彦 とう たけひこ（1992. 10採用）

## 1. 略歴

1963. 9生，1986 九大・文・史学卒，1988 九大大学院文学研究科・史学・修士課程修了，1992 同博士課程退学，同年 東洋学文献センター助手，東文研助手兼務。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

中国明清史を専攻。前近代中国経済の特質の解明，18世紀中国の文明史的位置づけを目標に，清代の銅銭を中心とした通貨政策史から研究を出発させたが，その過程において，(1)貨幣の使用慣行に端的に見られるような中国における地域差の問題とその地域差の中での中国北部地域の位置，(2)中国王朝が諸問題に対処する過程における文書行政の特質，という2つの新しい課題を得，現在これらの課題を中心に研究を進めている。

(1)に関して，従来，中国北部地域（直隸・山東・河南各省と若干のその周辺地域）は江南等の他地域と比べて，研究の蓄積に乏しかった。しかし，明清期の該地域には，周辺諸民族をも含めた「中華帝国」の政治的中心である現北京が存在し，また江南等からの資源が「帝国」システムにより集中する重要な地域であった。その一方で地域自体は経済的にも社会的にも江南に比して後進地域であり，その状況下，中国における中央と地方という問題が特殊な形で現れる地域でもあった。この観点から，永定河治水をめぐる中央政府と直隸省当局の錯綜した関係を分析した「清中期直隸省における地域経済と行政」を公表した。現在，明末から19世紀前半にいたる

## IX 所員の活動

いくつかの北京周辺地域の水利論の位相を検討し、そこに現れる諸問題を、経済的視点のみならず、政治社会史的な観点からも描き出していくことを目的に論文を執筆中である。

(2)に関して、上記の研究を進めるにあたっては、従来から用いられてきた漢籍史料の他に、档案史料と総称される一次史料群の利用が必須である。これらの史料は、単に従来の漢籍史料の間隙を埋めるだけのものではなく、その網羅的な残存性故に、その相互関係の分析により、情報処理システムとしての中国文書行政とその権力構造との関わりを解明することができる。また現在、琉球の対中国外交文書集である『歴代實案』の校訂作業に関わる機会を得たが、この作業を通じ中国本部のみならず東アジア世界に広がる壮大な文書行政のシステムを展望していきたいと考えている。

これら档案史料は、近年様々な形で出版されており、その利用の機会は増えつつあるが、その数は膨大で、未だ整理の途上であり、海外所蔵档案の調査は必要である。1994年6月から、文部省在外研究員として、北京の第一歴史档案館等において档案を中心とした史料の調査収集を行う予定である。

文献センターにおいては研究所所蔵の現代中国書の蔵書目録のデータベース化の作業を進行中である。これは従来のような冊子体目録のみによる提供だけではなく、internet等を通じての世界的な情報提供サービスを目標とするものである。漢籍整理長期研修に関しては、受講者配布資料である『漢籍整理参考資料』の改訂作業を現在行っている。

### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

史学会，東洋史研究会。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「乾隆初期の通貨政策——直隸省を中心として」『九大・東洋史論集』18  
1990年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3)の研究業績

「清中期直隸省における地域経済と行政——永定河治水を中心として」川勝

守篇『東アジアにおける生産と流通の歴史社会学的研究』1993年。

青木 敦 あおき あつし (1994. 4 採用)

## 1. 略 歴

1964. 4 生, 1988年 東大・文・東洋史卒, 1991 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 1992 中国人民大学留学, 1993 帰国, 1994 東大大学院博士課程退学, 同年 東文研助手。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

現在研究を進めている主要な研究テーマは10～13世紀中国の政治・経済、ことに宋朝と女真王朝の金朝の地方行政制度および官僚制である。

従来は発展段階論的な時代区分論を背景に、この時代の行政制度は独裁的体制と表裏させて理解されることが多かった。しかし近年、この時期の人口増大は政府の相対的な規模を縮小させ、また民間活力の増大も行政の指導力を弱めたはずであるとの指摘もある。この矛盾が研究の出発点であり、宋朝の中央地方関係を官僚制の内部の力と地方勢力との関係において捉るべく、監察制度の研究を行っている。ことに、地方勢力との関係が密である州・県の知事の人事がどの機関に握られているかを把握すべく、『宋会要』中の罷免事例の計量的研究をコンピュータを用いて行っている。資料の信頼性の評価にかんしては、『宋会要』職官64-75「黜降官」について『史学雑誌』102-7に発表してある。また、計量的研究の基礎作業となるべき人事制度の制度的研究は『宋代史研究会報告第五集』に発表の予定がある。財政についても、中央地方関係をテーマに、私的セクタについて考察している。「南宋の羨余と地方財政」『東洋学報』73-3・4で扱った羨余は、地方官から朝廷への献上物としての貨幣であり、財の中央集権を実現する反面、指令的な財政運営を破壊するものであったと考えている。また、明清の地方制度の基礎を供給した金元の地方制度についても金の行省を中心に追究している。10～12世紀は中央集権が強固であるというより、行政と民間あるいは中央と地方の関係が密となったと捉えるべきであるというの

## IX 所員の活動

が現在の結論である。また、身分法・女子財産権・民事的訴訟法・史料編纂等の各部門にわたって宋元時代は細かな立法、ルール志向が見られるが、これは行政の規模や事務能力が相対的に後退し、行政の基準化・ルール化が要請された結果であろうということを上述論文や『史学雑誌』103-5において述べた。

### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

史学会, 東洋史研究会, 宋代史研究会 (研究報告編集委員)。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「金末に於ける地方行政制度の変遷—行省・行六部・元帥府を中心として見た」『史学雑誌』97-12 1988年；「金末行尚書省 (行省) 制度の沿革—特に金末河北社会との関わりを中心に」『歴史学研究月報』347 1988年；「南宋の羨余と地方財政」『東洋学報』73-3・4 1992年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

『世界史を読む事典』朝日新聞社 (人名項目10～14世紀中国) 1944年；『宋会要』64-75「黜降宮」について』『史学雑誌』102-7 1993年；「回顧と展望 (五代・宋・元)」『史学雑誌』103-5 1994年 (印刷中)。

## 宮 嶋 博 史 みやじま ひろし

### 1. 略 歴

1948. 10生, 1972 京大・文・史学卒, 1974 京大大学院文学・東洋史・修士課程修了, 1977 同博士課程退学, 同年 京大文学部研修員 (1978まで), 1978 学術振興会奨励研究員, 1979 東海大学文学部専任講師, 1981 都立大人文学部助教授, 1983 東文研助教授, 1986 東洋学文献センター助教授兼務 (1987まで), 1992 東文研教授。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

朝鮮の李朝期から植民地期にかけての農村経済を中心とした経済史的研究を主たる研究テーマとしている。農村経済の変動こそが、長期にわたる対象期間の朝鮮社会の変動を、もっとも基底において支えたと考えるから

である。農村経済の変動を次の二つの側面から捉えるべく、これまで研究を進めてきた。すなわち一つには、農業技術の発展を基盤とした農業経営の発展の様相を明らかにすることであり、もう一つには、国家の土地制度や農民支配の体制をも含んだ農村をとりまく社会構造上の変化を明らかにすることである。前者に関しては、李朝期に著された農書の研究を進めるとともに、農業水利の発展過程の究明を行った。後者に関しては、日本による植民地化の直後に実施された土地調査事業（1910～18年）が朝鮮の土地制度・地稅制度史上に占める歴史的位罫を明らかにすべく、長年の研究をまとめて『朝鮮土地調査事業史の研究』（東文研報告）として、91年に刊行した。

上記のような研究を進める過程で、韓国の研究者との共同研究や海外資料調査を度々行ったが、とりわけ1987年に學術振興会の海外特別研究員として7か月、1989年に東文研の海外特別事業として1か月、韓国に滞在して、資料調査・現地調査を行ったことは、大きな力になった。

現在は、前掲著書で未解明なままに終った土地調査事業を前後する土地所有関係の変化を明らかにすべく、研究に取り組んでいる。1991年4月から1992年9月まで韓国に滞在して、李朝後期や大韓帝国期に作成された量案（一種の土地台帳）と、土地調査事業によって作成された土地台帳を、いくつかの地域に限定して比較しつつ、上記の課題を明らかにすることを目指している。

また近年韓国では、李朝期から近代にかけての私文書の発掘が急速に進みつつあるが、私文書に含まれている財産相続文書や土地売買文書等を調査することによって、量案や土地台帳のような国家の公的帳簿からは窺い知れない農村の実態を把握することも、現在の研究課題である。

以上のメインテーマの外、李朝期以降朝鮮社会に深く浸透し、農民生活をも律するようになった朝鮮儒教についても関心を持ち、いくつかの論考を発表してきたが、これからも経済史と思想史の境界領域に取り組みたいと思っている。



## IX 所員の活動

### 3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

韓国・淑明女子大学校文科大学 博士論文指導 1992年度前期, 東京大学  
人文系大学院東洋史学 近代朝鮮経済史研究 1992・93年度, 東京大学経  
済学部 朝鮮社会経済史研究 1993年度。

### 4. 学内行政事務分担 (1992. 4～1994. 3)

留学生交流委員会 (1993年4月～ )。

### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

朝鮮史研究会, 韓国経済史学会, 韓国古文書学会。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「朝鮮甲午改革以後の商業的農業」『史林』57-6 1974年；「李朝後期農書  
の研究」『人文学報』(京大人文科研) 43 1977年；「朝鮮史研究と所有論」  
『人文学報』(東京都立大) 167 1984年；「朝鮮社会と儒教」『思想』750  
1986年；『朝鮮土地調査事業史の研究』(東文研報告) 1991年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

『近代朝鮮水利組合の研究』(共著) 日本評論社 1992年 (韓国語版『近代  
朝鮮水利組合研究』一潮閣 1992年)；『地域からの世界史1 朝鮮』(共  
著) 朝日新聞社 1993年；「朝鮮における植民地地主制の展開」岩波講座  
『近代日本と植民地』3 岩波書店 1993年；「朝鮮両班社会の形成」『ア  
ジアから考える4 社会と国家』東京大学出版会 1994年；「東アジアに  
おける近代的土地変革」中村哲編『東アジア近代経済の形成』青木書店  
(1994年刊行予定)；「光武量案と土地台帳の比較分析」金鴻植編『土地調  
査事業の歴史的な性格』民音社 (韓国文 1994年刊行予定)。

川村 康 かわむら やすし

### 1. 略 歴

1961. 10生, 1984 早大・法卒, 1986 早大大学院法学・基礎法学・修士課  
程修了, 同年 同公法学・博士後期課程入学, 1987 早大法学部助手, 1990  
同退職, 同大学院博士後期課程退学, 同年 東文研助手。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

中国法制史を専攻し、宋代を中心として研究を進めている。その主たる研究分野は、家族法、刑罰法、法典編纂の三領域である。

第一の家族法の領域においては、養親子関係という擬制的親子関係を通じて、宋代における親子関係に側面から分析の手を加えた「宋代における養子法——判語を主たる史料として」(『早稲田法学』64巻1号・2号, 1988・89年)、贅壻すなわち入婿の法的地位に関して論じた「宗代贅壻小考」(『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院, 1993年)を公表している。これらの研究は、将来における宋代家族法の全体像の解明のための一段階である。

第二の刑罰法の領域においては、宋代における刑罰の特徴のひとつである法定刑と執行刑の乖離、ならびにそれらの移行の過程を中心に研究を進めてきた。死刑以外の正刑についてこの乖離現象を解決していた手段である折杖法に関しては「宋代折杖法初考」(『早稲田法学』65巻4号, 1990年)、「政和八年折杖法考」(『裁判と法の歴史的展開』敬文堂, 1992年)を公表した。死刑についての乖離現象の解決手段は唐建中三年に下された重杖処死法であるが、執行刑である杖殺は唐代から行われていたから、この問題に関しては唐代に遡った探究を行う必要がある。このため「建中三年重杖処死法考」(『中国礼法と日本律令制』東方書店, 1992年)において唐代から宋末に至る重杖処死法のあり方を検討し、杖殺の性格に関しては、唐・五代について「唐五代杖殺考」(『東文研紀要』117冊, 1992年)、宋代について「宋代杖殺考」(『東文研紀要』120冊, 1993年)を公表した。さらに、「宋代死刑奏裁考」(『東文研紀要』124冊, 1994年)では死刑執行手続の一環としての奏裁制度を考察した。将来は宋代における刑罰体系全体のあり方の再検討を目指している。

第三の法典編纂の領域においては、複雑な宋代の法典体系の解明を目的として、『宋刑統』以外に現存する、ほとんど唯一の法典である『慶元条法事類』の解題的研究「慶元条法事類と宋代の法典」(『中国法制史—基本資

## IX 所員の活動

料の研究』東京大学出版会、1993年)を發表し、現在は断例に関する研究を進めている。

### 5. 学外活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

史学会、中国社会文化学会、東方学会、東洋史研究会、比較法史学会、法制史学会 (『法制史文献目録』編集委員・『法制史研究』編集委員)。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3 まで)

「麴氏高昌国における土地売買についての一考察」『法研論集』41 1987年；  
「宋代における養子法——判語を主たる史料として」『早稲田法学』64-1, 2  
1988~89年；「宋代折杖法初考」『早稲田法学』65-4 1990年；「唐五代杖  
殺考」『東文研紀要』117 1992年；「建中三年重杖処死法考」池田温編『中  
国礼法と日本律令制』東方書店 1992年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4 ~ 1994. 3) の研究業績

「政和八年折杖法考」杉山晴康編『裁判と法の歴史的展開』敬文堂 1992年；  
「慶元条法事類と宋代の法典」滋賀秀三編『中国法制史——基本資料の研究』  
東京大学出版会 1993年；「宋代杖殺考」『東文研紀要』120 1993年；「宋  
代贅壻小考」柳田節子先生古稀記念論集編集委員会編『柳田節子先生古稀  
記念 中国の伝統社会と家族』汲古書院 1993年；「宋代死刑奏裁考」『東  
文研紀要』124 1994年。

松丸 道雄 まつまる みちお

### 1. 略 歴

1934. 8 生, 1958 東大・文・東洋史卒, 1960 東大大学院人文・東洋史・  
修士課程修了, 同年 東文研助手, 1966 同退官, 同年 オーストラリア  
国立大研究員(高等研究所極東史料), 1970 同退職, 同年 東文研専任講  
師, 1971 同助教授, 1977 東洋学文献センター助教授兼務(1980まで),  
1980 東文研教授, 1986 東洋学文献センター主任(教授)兼務(1987まで)。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

中国史研究のひとつの結節点である秦漢時代を遡って、文字資料によっ

て追求可能の上限である殷周時代からはじめ、春秋戦国期を通して秦漢に至るまでの歴史の過程を体系的に把握したというのが、私のそもそもの研究の出発点であった。

春秋期以前の信憑すべき古文献は著しく乏しい。したがって、殷代研究のためには、その後期王都と考えられる河南安陽出土の甲骨文が、また西周時代研究のためには、各地より出土する青銅器銘文（金文）が、研究資料の中核にならざるを得ない。これら二大出土文字資料は、共に考古遺物でもあり、当然資料への考古学的アプローチを欠かすことはできない。研究は勢い文献学的であると共に考古学的であるという二面性をもつことになる。

当初の研究は、甲骨文に基づく殷代史研究に集中した。甲骨文の地名を検討する中から、殷王の日常的行動範囲を考察し、その直轄区域は極めて限定されたもので、この国家は決して“古代殷帝国”といった表現によってイメージされるような規模と構造をもったものではなかったろう、と考えた（「殷墟卜辞中の田獵地について」）。これを基礎として、殷周両期を通しての新たな史的把握を目指して「殷周国家の構造」を書いた。

この論文を書く際、西周期を体系的に把握することに著しく困難を感じた。そこでこの時から、研究の中心を甲骨文から金文に移し、基礎資料を根本的に検討しなおすこととした。折から、金文史料の偽作問題が、世界的に話題になっており、私自身も深くこれに関わることになった。こういった過程を経て、金文資料を外形的のみならず、内面的史料批判の対象としなくてはなるまい、との反省が生じ、そこから、「西周青銅器製作の背景」等の、新たな史料批判方法論の確立を目指した論文を書くことになった。

その延長上の一方向として考えられるようになったのが、古代青銅器製作技術の解明である。青銅器およびその銘文の製作技法の解明がひとつの当面の課題となっているのは、そういった経過による。

こういった研究の基礎には、地道な機会を把えての史料蒐集・集積が不可欠である。甲骨文・金文・青銅器の拓本・写真等の蒐集が並行的に進め

## IX 所員の活動

られ、図録・目録等として継続して整理・刊行しつつある。

### 3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

東京大学大学院人文科学研究科 東洋史学・中国哲学 1992・93年度。



### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

日本甲骨学会 (代表者), 史学会 (評議員), 東方学会 (評議員), 東大中国学会 (評議員), 書学書道史学会 (常任理事), その他参加学会は多数につき省略, 鄭州大学殷商文化研究所 (名誉研究員)。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「殷墟卜辞中の田獵地について——殷代国家構造研究のために」『東文研紀要』31 1963年；「殷周国家の構造」『岩波講座・世界歴史』4 1970年；「西周青銅器製作の背景——周金文研究・序章」『東文研紀要』72 1977年；『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字』図版篇 東文研報告 1983年；「西周後期社会にみえる変革の萌芽——召鼎銘解釋問題の初歩的解決」『西嶋定生博士還暦記念 東アジア史における国家と農民』山川出版社 1984年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

『甲骨文字字釋綜覧』(高嶋謙一氏と共編) 東文研叢刊 1993年3月；「《甲骨文字字釋綜覧》概要」(高嶋謙一氏と共同執筆)『中國史研究動態』(北京・中國社会科学院歴史研究所) 1992年第6期 (総162期) 1992年；「關於西周時代重量单位  和 

 輔仁大学中国文学系所・中国文字學會主編『第三屆中國文字學國際學術研討會論文集』台北・輔仁大学出版社 1992年；「西周金文中の法制史料」(竹内康浩氏と共同執筆) 滋賀秀三編『中國法制史——基本資料の研究』東京大学出版会 1993年；「新発見の“中国最古の漢字”」(上)『出版ダイジェスト』1481 1993年；「甲骨文字の“解讀”」(講演要旨)『東洋學報』75-1・2 1993年；「殷周金文はどのように作られたか」(上)『新しい漢文教育』(全国漢文教育学会) 17 1993年；「新発見の“中国最古の漢字”」(下)『出版ダイジェスト』1493 1993年；「再論殷墟卜辞中の田獵地問題」『張政烺先生八十壽辰論文集』北京 (待刊)；「『中国美術全集・青銅器 (上)』解説」京都・京都書院 (待刊)；許青松「書藝術の

幼年時代——館蔵殷墟甲骨文字をめぐる諸問題」(翻訳)『中国歴史博物館蔵法書大観』所収(待刊)；馬旭「殷代金文序説」(翻訳)同上(待刊)；“A Radicaly New Hypothesis Regarding the Casting Method of Inscriptions in Ancient Chinese Bronze Vessels,” *1988 Kioloa Conference Proceedings* (待刊)；「殷周金文はどのように作られたか」(下)『新しい漢文教育』(全国漢文教育学会)(待刊)。

平勢 隆郎 ひらせ たかお (1992. 10 転任)

## 1. 略 歴

1954. 8 生, 1979 東大・文・東洋史卒, 1981 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了, 同年 鳥取大学教育学部助手, 1984 同専任講師, 1987 同助教授, 1990 九州大学文学部助教授, 1992 東文研助教授。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

中国史上の大変革期である春秋戦国時代の歴史的性格は何か, これを検討したのが, 研究上の出発点であった。その後, このテーマを一貫して追求してきている。一方, 教育研究の機会が得られた鳥取大学教育学部・九州大学文学部において, 東アジア的視点から, 鳥取など日本の地域に根ざした研究を進めた。幸いなことに, その地域研究も, 中国古代史研究と相互に関連を深めつつある。

春秋戦国時代を検討する上で, 銘記しなければならないことは, 史料批判が他の時代に比較してより特殊な位置づけをもつことである。というのは, 春秋およびその前代を語る史料が, ほぼ戦国時代に成書されたもので, その時代の社会的影響を強く受けてあるからである。後代の影響はいつの時代史料にもあり得るが, 春秋から戦国にかけては, 中国史上の大変革期にあたっているため, この種の影響を排除しないと, 春秋時代について全く異なる時代認識を得てしまうからである。

史料批判のため活用がはかられているのは, 第一に考古史料である。伝存の文献史料の欠を埋め, 字句上・解釈上の誤りを正す。春秋戦国時代を

## IX 所員の活動

ひもとく者は、必ずこの考古史料を参照しなければならない。金文を始めとする古文字史料の存在をにらみつつ、伝存文献においていかなる部分を使用すべきかを模索し、人名・地名に着目し情況証拠を傍証としてまとめたのが初期の研究である。そこでは、以後の地方行政を支えた県の出現と展開を論じた。ついで、考古史料の検討を通じてその深化をはかった。

考古史料としてまとまって出土しながら、内容・辞句は相同のものが多いという理由によって、さほど活用されていなかったのが侯馬盟書である。筆者は報告書を二次的に分類整理することによって、考古学的にアプローチし、盟書作成の具体的プロセスを推論した。その作業の基礎の上に、従来誤っていた人名字を釈読しなおし、伝存の文献史料に記された人物であることを指摘して、作成時期を決定している。

戦国時代の史料には、とくに年代上の相互矛盾が少なからず認められる。春秋時代については、『春秋』・『左伝』という編年史料が絶対年代を比較的正しく提供し、司馬遷も『春秋』のみでなく『左伝』まで参照し得たと見られる。史料相互に矛盾が生じて、ずれはわずかである。しかし、戦国時代には、この種の典範とすべき編年史料が彼の時代にすでに不足していたらしく、史料相互に多くのずれを生ぜしめている。ずれの度合いも著しい。近年の筆者の研究では、この種のずれのよってきたる原因が、君主在位の称元法ならびに暦法についての、司馬遷の誤認にあることを明らかにした。現在、新しい年表を作成し、また関連問題を議論して、順次公表している。

その関連問題には、音楽理論を基礎とする宇宙観がある。音楽理論により、天に9、地に6、人に8を配し、暦・度量衡を説明した。東アジア古代に八角形を平面形として表現する建築が少なからず存在することには、『漢書』律曆志に示されたこの種の宇宙観が影響していると思われる。鳥取古代の石造建築、岡益の石堂が、これを立面形に表現した建築群の中に位置づけられること、使用尺は、戦国以来の伝統尺と考えられることをまとめている。

戦国時代以来の議論から皇帝観が確立されてくる。そこでは皇帝を頂点とする世界観の中に周辺諸国を位置づけた。日本の亀跌碑は、実施調査の結果、鳥取池田家や水戸徳川家などの大名墓や、寺院等に散在することがわかった。そのあり方は、古代以来の東アジア冊封体制が、江戸時代の中央政界においても、現実的意味をもっていたことを推論している。

鳥取においては、遺跡調査・遺物整理に直接関わった。中国考古の研究を進める上で参照すべきノウハウを得た。鳥取大学教育学部所蔵の郷土史料も整理した。これが発端となって始めた江戸時代『左伝』注釈の整理検討を、現在継続中である。この種の注釈は、直接研究の対象であるのはもちろんだが、近代以来の研究に先行する研究としても位置づけを進める必要がある。

3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

九州大学文学部・東洋史学 先秦史の諸問題 1992年度, 同大学院文学研究科・東洋史学 古文字研究上の諸問題 1992年度・東京大学大学院人文研究科・東洋史学 先秦史の諸問題 1993年度, 東京大学教養学部 『史記』列伝講読 1993年度。

4. 学内行政事務分担 (1992. 4～1994. 3)

本郷地区キャンパス整備委員会 (1993年4月～ )。

5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

史学会, 日本甲骨学会, 東洋学会, 社会文化学会, 九州史学会, 東洋史研究会, 東方学会, 日本中国考古学会, 島根考古学会, 歴史学研究会, 書学書道史学会。

6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「楚王と県君」『史学雑誌』90-2 1981年；「趙孟とその集団成員の“室”——兼ねて侯馬盟書を検討する」『東文研紀要』98 1985年；「『左伝』昭公十三年“靈王遷許胡沈道房申於荆焉”をめぐって——対楚従属國の遷徙問題」『東洋史研究』46-3 1987年；『春秋晋国侯馬盟書字体通覧——山西省出土文字資料』『東洋学文献センター叢刊』別輯15 1988年；「『侯馬盟書』



## IX 所員の活動

“𠄎”・“𠄎”の字釈とその関連問題——“趙「稷」・「范」氏”なる字釈による時期決定の検討を基礎として」『史苑』128 1991年。

### 7. 過去2年間(1992. 4～1994. 3)の研究業績

「戦国期年再構成に関する試論——君主在位の称元法からする古本『竹書紀年』の再評価」『史学雑誌』101-8 1992年；「日本近世の亀跌碑——中国および朝鮮半島の歴代亀跌碑との比較を通して」『東文研紀要』121・122 1993年；「中国古代の皇帝と暦」『文明のクロスロード・Museum Kyushu』(博物館等建設推進九州会議) 45 1993年；同英文訳, *Memoirs of Research Department of the Toyo Bunko*, 1993年；「戦国時代徐州の争奪」川勝賢亮編『東アジアにおける生産と流通の歴史社会学的研究』中国書店 1993年；「戦国紀年再構成に関する試論——続」『東文研紀要』123 1994年。

## 東アジア部門 (第二)

蜂屋 邦夫 はちや くにお

### 1. 略 歴

1938. 11生, 1963 東大・教養・教養卒, 1965 東大大学院人文・比較文化・修士課程修了, 1968 同博士課程退学, 同年 東文研助手, 1974 同退職, 同年 東大教養学部非常勤講師, 同年 東文研助教授, 1987 同教授, 1992 文学博士(東大)。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

中国思想史の研究を継続して行なっている。中国思想の柱として儒教、道家道教、仏教の三教(三種の思想)があるという基本的認識のもとに、それぞれの側面および三者の影響関係について考察してきた。

三教が三教として問題になるのは、仏教が中国読書人階級に広く関心を持たれた東晋以降のことであると考え、まず東晋における仏教の受容の問題を検討した。その際、仏教は道家思想を基盤として受容されたので、

考察の主要部分は仏教の思想交渉の問題となり、これについて、孫綽、孫盛、王坦之、戴逵らを取りあげ、それぞれ専論のかたちで論文を書いた。

一方、班研究として79年以来『儀禮疏』の講読会を行ない、その成果を『儀禮士冠疏』(84年)、『儀禮士昏疏』(86年)の両書にまとめた。これは儒教方面の研究である。ひきつづいて三教交渉史の史料として唐初に撰述された『弁証論』を輪番制で研究し、その成果を蓄積してきている。

この間、85年以来、中国との学術交渉を断続的に行ない、85年には六朝思想史を主題とする情報交換を中国主要研究所、大学で行なった。同時に、道観調査に着手し、北京、西安、成都、武漢、上海の道教の現状を瞥見した。それを機縁として、87年、88年の両年度に、「中国道教の現状調査」を主題として海外学術調査を実施した。これは、主として陝西、四川両省の道教調査である。その結果を『中国道教の現状』(本文冊・図版冊 90年)として刊行した。

90年には10か月にわたって在外研究に従事し、上海の大学を拠点として、北京大学哲学系、四川社会科学院哲学研究所その他と学術交流を行ない、また、山東、遼寧、江蘇、四川等の道教調査も行なった。

90年末に帰国し、91年には12世紀に華北において成立した道教である全真教の、開祖王重陽と第二祖馬丹陽の生涯と教説について、在外研究の成果を踏まえながら東文研報告として執筆した。すなわち、ここ数年の研究の中心は道教方面にある。91年度の事業として『金代道教の研究——王重陽と馬丹陽』を完成させ、その後は道教調査を継続して行ない、92年度から3年間の海外学術調査を実施中である。

### 3. 教育活動(1992. 4～1994. 3)

東京大学人文系大学院中国哲学 特殊研究：曹魏の思想 1992・93年度、  
広島大学文学部 中国近世思想史特講 1993年。

### 4. 学内行政事務分担(1992. 4～1994. 3)

人文科学研究科委員会(1992年4月～1993年3月)。

### 5. 学外活動(1992. 4～1994. 3)

## IX 所員の活動

日本中国学会，日本道教学会，中国社会文化学会（評議員）。

### 6. 過去の主要業績（1992. 3まで）

編『儀禮士冠疏』東文研叢刊 1984年； 編『儀禮士昏疏』東文研叢刊 1986年； 編『中国道教の現状—道士・道協・道観』本文冊・図版冊 東文研叢刊 1990年；『金代道教の研究』東文研紀要別冊 1992年；「劉長生の生涯と教説」『東文研紀要』117 1992年。

### 7. 過去2年間（1992. 4～1994. 3）の研究業績

『中国の不思議な物語：夢と幻想・寓意譚』同文書院・アテナ選書4 1993年；「道教研究の現状と課題一斑」『未名』11 1993年；「中国の名山と道教」『日中文化研究』4《特集》海と山の文化 1993年；「水が告発する現代文明の陥穽 河川局長対談①哲学：河川行政と古代中国の水思想」『河川レビュー』83 1993年；「白居易と老荘思想：併せて道教について」勉誠社白居易研究講座第1巻『白居易の文学と人生 I』1993年；「中国調査旅行」月刊『しにか』5-3 1994年。

## 丘山 新 おかやま はじめ

### 1. 略歴

1948. 6 生，1972 京大・理・物理学卒，1976 東大大学院人文・印哲・修士課程修了，1979 同博士課程退学，同年 財団法人東方研究会専任研究員，1980 中国・北京大学留学(1982まで)，1986 日大文理学部専任講師，1990 東文研助教授，1992. 3～1993. 2 ミュンヘン大学客員研究員，1994 東文研教授。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

従来，漢訳仏典を史料として東アジア地域における宗教思想の研究を進めてきた。そしてその研究は，次の二方面からなる。(一)漢訳仏典の語彙的研究：インドからもたらされた仏教教典を中国語に翻訳する際に，訳者は一般の文章語には用いられない口語表現（語彙・語法）を多く採用したり，新しい語彙を創りだした。これらの語彙や語法の体系的な整理・研究

は、漢訳仏典をより精確にするためにも、またさらには中国中古（六朝・隋唐）時代の語法研究のためにも、不可欠の基礎作業である。また、サンスクリット原典との比較研究により、中国語に翻訳される段階ですでに仏典は中国的に変容されていることを解明してきた。この方面での成果は、『長阿含経』の一連の翻訳・注釈（単行本全4冊として平河出版社から刊行予定）や「漢訳仏典の文体論と翻訳論」等の論文でその一部を示した。また、漢訳仏典と日本文化の関わりについても「漢訳仏典論」で指摘した。

(二)漢訳仏典の受容に関する研究：漢訳仏典は、そのインドにおける主題と関わりなく、中国人の各時代の問題意識に基づいて受容されていった。従って、それぞれの経典がどの様に受容されたかを探ることにより、中国における各時代の時代思潮の一端を解明しうるであろう。この様な観点により中国仏教史を中国の文化史の一部として新たに再構築すべく研究を進めてきた。「『大阿弥陀経』の思想史的意義」や「漢訳仏典と漢字文化圏——翻訳文化論」は、この方面での成果の一部である。以上の二方面からの漢訳仏典の研究は今後も継続され、体系化されてゆくであろう。

また、最近は仏教信仰の根本的構造を解明し、アジアの宗教、特に仏教に基づく新たな宗教哲学の理論構築をも目指しており、その一端を、「閉じられた自己」から「開かれゆく自己」へ——仏教における自己と他者」として明らかにした。このいわば宗教に関わる普遍的課題の解明は孤立した課題ではなく、この作業を通して、逆に東アジアの各文化圏のそれぞれの文化的特質も明らかにされるはずである。また、現在、任継愈主編『定本 中国仏教史』全8巻を監修・翻訳中で（既刊第1巻、第2巻）、現在の中国における仏教研究の最新の成果を紹介することになる。なお、1992年度はドイツ・ミュンヘン大学からの招聘により、客員研究員として1年間中央アジア出土漢訳仏典の研究に従事した。

### 3. 教育活動（1992. 4～1994. 3）

東京大学人文科学研究科 中国哲学・印度哲学印度文学専攻 漢訳仏典の研究 1992・93年度。

## IX 所員の活動

### 5. 学外活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

中国社会文化学会 (評議員), 東方学会 (論文目録編集委員), 日本印度学  
仏教学会, 日仏東洋学会, 東西宗教交流学会。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3 まで)

「漢訳仏典の文体論と翻訳論」『東洋学術研究』22-2 1983年; 「東晋期仏  
教における言語と真理」『東洋文化』66 1986年; 「漢訳仏典論」『東アジ  
アの仏教』1988年; 「『大阿弥陀経』の思想史的意義」『東洋文化』70 1990  
年; 「「閉じられた自己」から「開かれゆく自己」へ——仏教における自己  
と他者」『東文研紀要』117 1992年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4 ~ 1994. 3) の研究業績

『定本 中国仏教史 I』(共訳) 柏書房 1992年; 『定本 中国仏教史  
II』(共訳) 柏書房 1994年; 『現代語訳 長阿含経』(共訳) 平河出版 1994  
年; 「超越: 他者を見捨てて何処へ?」『超越と神秘 中国・インド・イス  
ラムの思想世界』大明堂 1994年; 「漢訳仏典と漢字文化圏——翻訳文化  
論」『東アジア社会と仏教文化』春秋社 1994年6月 (予定)。

## 田仲 一成 たなか いっせい (1993. 4 配置換)

### 1. 略 歴

1932. 11生, 1955 東大・法卒, 同年 日本相互銀行入社, 1957 同退社,  
同年 東大大学院人文・中文・修士課程入学, 1959 同修士課程修了, 同  
年 同博士課程入学, 同年 都立深川高校教諭, 1962 同博士課程満期退  
学, 1963 都立新宿高校教諭, 1965 同退職, 1966 北大文学部助手, 1968  
熊大法文学部専任講師, 1969 同助教授, 1972 東文研助教授, 1974 東  
洋学文献センター助教授兼務(1976まで), 1981 東文研教授, 1983 文学  
博士(東大), 1987 東洋学文献センター主任(教授)併任(1988まで), 1993  
金沢大学教授に配置換, 同年 東大名誉教授。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

この15年間, 華中, 華南地域の農村祭祀演劇の現地実態調査に専念して

きた。香港，シンガポール，マレーシア，タイなど，東南アジアの華僑社会に残存している祭祀演劇の調査に約10年を費やし，研究の視点と基礎史料を獲得するようにつとめた結果，大筋の歴史的な見通しを得た。近五年はこの成果をふまえ，中国大陸の農村祭祀演劇の調査に集中している。中国側でも近年，民族学，宗教学の影響が強く，新史料の発掘紹介も進んできているので，交流しやすい条件にある。引きつづき，仮面劇，目連戯はじめ宗教劇の研究を進めていく方針である。

3. 教育活動（1992. 4～1993. 3）

山口大学人文学部 中国演劇史 1992年度，東京大学文学部 中国戯曲史 1992年度。

5. 学外活動（1992. 4～1993. 3）

日本中国学会，東方学会。

6. 過去の主要業績（1992. 3まで）

「十五・六世紀を中心とする江南地方劇の変質について」『東文研紀要』60・63・65・71・72・102 1973～87年；『中国祭祀演劇研究』東文研報告 1981年；『中国の宗族と演劇』東文研報告 1985年；『中国郷村祭祀研究』東文研報告 1989年；“The *Jiao* Festival in Hong Kong and N. T.,” in Julian Pas ed., *Religion in China Today*, Hong Kong Branch of Royal Asiatic Society, 1989。

7. 1992年度の研究業績

『中国巫系演劇研究』東文研報告 1992年；「江西傩舞参観記」（中文）『江西画報』（中国南昌江西画報社）1992年4月号；「浙東宗族的祠産形成与宗祠演劇—蕭山県長河鎮来姓祠産簿剖折—」（中文），『清代区域社会経済研究』（中国北京中華書局）1992年；「『唐僧取経図冊』故事初探」『国華』1163 1992年；「新加坡“五虎祠”義士考—潮州天地会会党与新加坡義興公司的關係」（中文）『饒宗頤教授七十五歳紀念論文集』（香港中華書局）1993年；「宗祠戯劇在廣東宗族裡産生与発展的過程」（中文）『羅香林教授紀念論文集』（台北，新文豊出版）1992年；「香港農村の祭祀芸能“売雜貨”とイスラム

## IX 所員の活動

商人との関係』『創大アジア研究』14 1993年。

丸尾 常喜 まるお つねき

### 1. 略 歴

1937. 3 生, 1962 東大・文・中文卒, 同年 大阪市大大学院文学・修士課程入学, 同年 私立啓光学園教諭, 1964 同退職, 大阪市大大学院修士課程退学, 同年 熊本県立人吉高校教諭, 1968 北大文学部助手, 1973 同助教授, 1990 東文研教授, 1992 博士(文学・東大), 文学部併任教授。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

研究分野は中国古典小説研究と中国現代文学研究の二つに分けられる。

前者は、個別的なテーマにたいして深く掘り下げるよりも、むしろ通観的な歴史研究を中心とする。この分野の成果として、訳注書『中国小説の歴史の変遷』(凱風社 1987年), 「分裂と団円——『離魂記』を読む」(『竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢』, 汲古書院, 1991年)などがある。また宋代に上演された記録をのこし、各地に伝承されてきた『目連戯』にも関心を抱き、1990年に田仲一成教授を代表とする海外学術調査「中国郷村祭祀演劇調査団」に一部参加し、10日間にわたって浙江省各地の目連戯調査を行った。

後者は、特に1975年以後は魯迅の文学について研究をすすめ、ほぼ系統的に論文を発表してきている。その出発点となったのが「狂人日記」第十二節末尾一句の読解に関するノート「『難見真的人!』考」(『熱風』4 1975年)で、この一句に魯迅自身の「民族的羞恥」の意識を見る見解である。その後の「民族的自己批評としての魯迅文学」という副題を持つ「出発における『恥辱』(羞恥)の契機について」(『北大文学部紀要』25-2 1977年)以下の一連の論考は、魯迅における「羞恥」がその後どのような運動によってどのような軌跡を描いたかを追求したものであり、のちに評伝『魯迅』(集英社 1985年)の軸となった。

1983年の「阿Q人名考」(『文学』51-2)は、「阿Q正伝」の主人公阿 Quei

の名は「鬼」の諧音つまり「阿Q」は「阿鬼」であり、作品は中国民族の国民性の重大欠点として認識された奴隷精神の遺伝性に着目して、それを「鬼」ととらえ、同時にそれに民俗的な「鬼」の諸相を重ねたものであることを、重ねられている宗教的、民俗的な「鬼」の観念や説話、小説、目連戯などの旧劇に見出される「鬼」の表象の具体的な指摘によって証明しようとした。この一編は、中国宗教史、思想史、社会史上重大な意味を持つ「鬼」の有無をめぐるストーリーを展開した「祝福」、科挙の敗残者の姿を通して中国伝統文化の重大な困難を剔抉した「孔乙己」を論じた論考などとともに、大幅な増訂を加えて学位論文にまとめられ、『魯迅：「人」「鬼」の葛藤』（岩波書店 1993年）の題名で刊行されている。

3. 教育活動（1992. 4～1994. 3）

愛媛大学文学部 中国文学特殊講義 1992年度、京都大学文学部 中国文学特殊講義 1992年度、神戸大学文学部 中国文学特殊講義 1993年度、東京大学人文科学研究科 中国文学特殊研究 1992・93年度、東京大学文学部 中国文学演習 1992・93年度、東京大学教養学部 芸術思想一般 1993年度。

4. 学内行政事務分担（1992. 4～1994. 3）

人文科学研究科委員会（1993年4～ ）。

5. 学外活動（1992. 4～1994. 3）

東方学会、日本中国学会、現代中国学会(理事)、中国社会文化学会(理事)。

6. 過去の主要業績（1992. 3まで）

共編『魯迅文言語彙索引』東洋学文献センター叢刊 1978年； 訳『彷徨』（『魯迅全集』2）学習研究社 1984年；『魯迅——花のため腐草となる』集英社 1985年； 訳注『中国小説の歴史的変遷——魯迅による中国小説史入門』凱風社 1987年。

7. 過去2年間（1992. 4～1994. 3）の研究業績

『魯迅：「人」「鬼」の葛藤』岩波書店 1993年；「難見真的人！」再考—「狂人日記」第十二節末尾の読解 魯迅論集編集委員会編『魯迅研究の現在』



## IX 所員の活動

汲古書院 1992年；(翻訳) 錢理群，王乾坤著「思想家としての魯迅」(任  
明信と共訳)『東洋文化』74 1994年。

山之内 正彦 やまのうち まさひこ (1994. 3 退職)

### 1. 略 歴

1933. 10生，1961 東大・文・東洋史卒，1963 東大大学院人文・中文・修  
士課程終了，1964 同博士課程退学，同年 東文研助手，1983 東洋学文  
献センター助手，1989 東文研助手，1994 同停年退職。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

- 1) 晩唐より北宋末に至る詩歌(詩と詞)における豔情(性愛)の変容。  
定点として李商隠・温庭筠および『花間集』・歐陽脩・晏幾道・柳永・周  
邦彦を扱ひ，現在周邦彦の詞を精読中。
- 2) 唐・宋詩における〈梅花〉のイメージの変容。用例(六朝詩・唐詩に  
ついては詩句，宋詩については題詠詩)の採集(カード約1500枚)を終  
り，検討中。所外の学徒とともに「唐詩研究会」に参加，その共同研究  
「唐詩の植物」の一環である。
- 3) 『滄浪詩話』以後のもっとも体系的な詩論書である清初の葉燮の『原詩』  
訳注。原書のほぼ半ばまで粗訳進行中。

以上いずれも発表には至っていない。

### 6. 過去の主要業績(1992. 3まで)

「李商隠表現考・断章——艶詩を中心として」『東文研紀要』48 1969年；  
「落日と夕陽——唐詩における夕日の詩語初探」『東文研紀要』63 1974  
年；「孟郊詩論——連作詩を中心に(上)」『東文研紀要』68 1976年；「桂  
——唐詩におけるその〈意味〉」(正編及び補遺)『東文研紀要』88・92 1982・  
83年； 共著『中国文学歳時記・春下 秋上』1988・89年。

笠井 直美 かさい なおみ (1993. 4 採用)

### 1. 略 歴

1965. 11生, 1987 中国・山東大学留学 (1988まで), 1989 東大・文・中文卒, 1991 東大大学院人文・中文・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 1992 学術振興会特別研究員 (1993まで), 1993 東大大学院・人文・中文・博士課程退学, 同年 東文研助手。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

研究の基本テーマは、中国俗文学（小説、戯曲、説唱、語り物等。時代としては元～清代）を主要な材料として、前近代中国における「正しさ」や「秩序」に関わる物の見方、考え方を、できるだけ広く、なるべく下層にわたって明らかにすることである。これまでは、特に小説『水滸伝』とそれに関連する戯曲を中心に、その成立・流伝・分化・受容の様相を検討し、当時の批評とあわせて、秩序を逸脱すること、逸脱した者への「正しさ」の付与の是非・その際の「正しさ」の由来と基準等について、特にこれらの点に関する各テキスト間の認識の分岐・断層について、考察を試みてきた。現在は講史・公案ものなど、『水滸伝』関連以外の題材の俗文学諸作品に広げるとともに、俗文学以外の、上記の問題に関連する諸言説もなるべく広く検討することにより、こうした俗文学諸作品の位置をより具体的・立体的に把握したいと考えている。

## 3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

放送大学 千葉学習センター 中国語 I・II 1992・93年度。

## 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

日本中国学会, 東方学会, 中国社会文化学会。

## 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「『義賊』の誕生——雑劇『水滸』から小説『水滸』へ」『東洋文化』71 1990年；「金陵世徳堂刊『水滸記』について」『東方学』83 1992年。

## 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

「隠蔽されたもう一つの『忠義』——『水滸伝』の『忠義』をめぐる論議に関する一視点」『日本中国学会報』44 1992年；「『水滸』における『対立』の構図」『東文研紀要』122 1993年； 翻訳：江巨栄「復旦大学図書館趙

景深文庫について』『中国——社会と文化』8 1993年。

戸田 禎佑 とだ ていすけ (1993. 4 配置換)

1. 略 歴

1934. 9 生, 1957 東大・文・美術史卒, 1958 日本テレビ入社, 同年 退社, 1959 東大大学院人文・美術史・修士課程入学, 1962 同修了, 同年同博士課程退学, 同年 東京国立文化財研究所(文部技官), 1971 東文研専任講師, 1972 同助教授, 1980 東洋学文献センター助教授兼務(1982まで), 1981 京大人文研助教授併任(1982まで), 1982 東文研教授, 1988 東洋学文献センター主任(教授)併任(1991まで), 1993. 4 文学部配置換。

2. 研究活動の概要・研究経過

中国絵画史, 就中, 南宋, 元時代の作品に焦点をあてて研究を進めている。『東洋文化研究所紀要』117号の「牧谿における宋と元」, 『国華』1016号の「南宋院作画における金の使用例」, 『大和文華』86号に発表した「南宋のイリュージョニズム」あるいは『国華』1152号の「毛倫筆・牧牛図」等は, いずれも南宋絵画の水墨的技法に支えられたグラデーションによる微妙な光の表現のあり方を追求したもので, このような強固な自然主義的表現の延長に, 元以降の, あるいは朝鮮半島, 日本の絵画をおくことにより, その展開の具体相はより明確になると考えている。このような立場から, 日本絵画史に対しても多くの提言を行って来て, それは「美術史における日中関係」(『美術史論叢』7)として発表した。すなわち, 日本と中国の美術史は個々に論ずるよりも一つの有機的な共同体してみる方が研究の成果が上がるという基本的考え方を具体例をあげて指摘したわけである。そのことにより, 日中双方の遺品の欠落, 文献史料の欠落を補いあえる筈であるからである。

上記の如き個人的な研究活動の他, 美術史は作品の実地調査研究が不可欠であり, 1990年度にはヨーロッパ各地の中国絵画コレクションの調査撮影旅行を行ない, 多くの写真資料を蒐集し, 1991年度には, これをアメリ

カ・カナダに行なった。現在、東アジア美術の中国写真アーカイブは、世界で最も充実しているものの一つになっている。

3. 教育活動 (1992. 4 ~ 1993. 3)

東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻 東洋美術史演習 1992年度。

5. 学外活動 (1992. 4 ~ 93. 3)

美術史学会 (常任委員会委員), 文化財保護委員会専門審議委員, 『国華』編集委員。

6. 過去の主要業績 (1992. 3 まで)

『牧谿・玉澗』1973年; 共編『海外・日本所在中国絵画目録』全5冊 東洋学文献センター叢刊 1977~83年; 『静嘉堂中国絵画』1986年; 「南宋院体画における『金』の使用について」『国華』1016 1988年; 「南宋のイリュージョニズム」『大和文華』86 1991年。

7. 1992年度の研究業績

共編『海外所在絵画目録 改訂増補版 (ヨーロッパ編)』東洋学文献センター叢刊別輯17 1992年; 「『唐僧取経図冊』の様式的検討」『国華』1163 1992年。

小川 裕充 おがわ ひろみつ

1. 略 歴

1948. 10生, 1973 東大・教養・教養卒, 1977 東大大学院人文・美術史・修士課程修了, 1979 同博士課程退学, 同年 東文研助手, 1982 東北大文学部助教授, 1987 東文研助教授, 1990 ハイデルベルク大学客員教授, 1992 東文研教授, 1993 北京日本学研究センター客員教授。

2. 研究活動の概要・研究経過

中国絵画を中心とする古代から中世の東アジア絵画史を主たる研究対象としている。具体的には、より構成主義的な華北山水画とより非構成主義的な江南山水画という二大潮流の対立と総合の観点から中国山水画を把握

## IX 所員の活動

してゆくことが第一点。古代から中世の東アジア世界に通有の思想であった陰陽五行説に基づく、中国および我国における障壁画の構成原理が、個々の造形作品にどのように実現されているのかを解明してゆくことが第二点。同じく古代から中世の花鳥画の中心的な素材であり続けた丹頂の六つに限定される型の、初唐から我国近世初頭まで及ぶ展開を跡づけることが第三点である。この第一点と第二点は、山水画が、第二点と第三点も、花鳥画が、彼我いずれの国においても障壁画の重要な分野となっていたという意味で、繋がってくる。早く鑑賞絵画が独立した中国絵画史固有の展開の中で、その造形活動を捉えるのみならず、明確な用途をもった絵画制作の範疇においても、中国を中心とする東アジア絵画史に視野をおきつつ、その再把握を行ってゆきたいと考えている。

世界各地の公私のコレクションに所蔵される中国絵画の総体的な把握を基礎とし得るという意味で、上記の個人的な研究活動の支えとなっているのが、東アジア美術研究室の継続的な任務として、この30年以上にわたって一貫して集積されてきた、中国絵画写真資料であり、無慮十万点に及ぶ世界的な規模の資料数を誇る写真アーカイヴを維持・拡大してゆくことも研究活動の本質的な部分をなす。また、この写真資料を基礎として、中国本土と台北故宮博物院を除く、日本・東アジア・アメリカ・カナダ・ヨーロッパの公私のコレクションに所蔵される中国絵画の総カタログである『中国絵画総合図録』の改訂増補版を刊行することも、中国大陸や台北故宮博物院のそれを収載した『中国古代書画図目』や『故宮書画図録』と相補いあう点で、やはり不可欠の研究活動となっており、その準備のため、文部省科学研究費や三菱財団・トヨタ財団・鹿島美術財団の助成を得て、90年にヨーロッパ、91年にアメリカ・カナダ、92年に香港・台湾・韓国調査撮影旅行を実施した。また、それら海外調査に並行して、92・93両年度にわたって我国国内の公私コレクションの抜本的再調査も行い、多大の成果を上げることができた。本年度以降は、それら資料の整理を逐次進めてゆく予定である。

3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

東京大学大学院人文科学研究科 東洋美術史演習 1992・93年度, 東京大学文学部 美術史学 中国絵画史講読 1992・93年度, 東北大学文学部・文学研究科 東洋日本美術史 中国絵画史 1993年度。

4. 学内行政事務分担 (1992. 4～1994. 3)

総合研究資料館運営委員会 (1992年4月～1994年3月)。

5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

美術史学会, 東方学会, 古文化財科学研究会, 密教図像学会。

6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「唐宋山水画におけるイメージーション(上)(中)(下)」『国華』1034・1035・1036 1980年; 「院中の名画——董羽・巨然・燕肅から郭まで」『鈴木敬先生還暦記念 中国絵画史論集』1981年; 共著『中国の花鳥画と日本』1983年; 「大仙院方丈襖絵考(上)(中)(下)」『国華』1120・1121・1122 1989年; 「薛稷六鶴図屏風考」『東文研紀要』117 1992年。

7. 過去2年間(1992. 4～1994. 3)の研究業績

「黄筌六鶴図壁画とその系譜(上)」『国華』1165 1992年; 「中国絵画—東アジア国際様式の消長」『日本美術全集 12 水墨画と中世絵巻 南北朝・室町の絵画 I』講談社 1992年; 「相国寺蔵 文正筆 鳴鶴図(対幅)(上)(下)」『国華』1166・1182 1993年・94年; 『海外所在中国絵画目録 改訂増補版(アメリカ・カナダ編)』(共編著) 東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター叢刊 別輯18・19 1994年; 「中国山水画百選 29 騎象奏楽図(楓蘇芳染螺鈿槽琵琶捍撥)」 「30 信貴山縁起絵巻(延喜加持巻)」 「31 李唐 山水図(対幅)」 「32 李氏 瀟湘臥遊図巻」 「33 王洪 瀟湘八景図巻」 「34 趙伯驩 万松金闕図巻」 「35 馬遠 西園雅集図巻(春遊賦詩図巻)」 「36 夏珪 風雨山水図团扇」 「37 李嵩 西湖図巻」 「38 梁楷 雪景山水図」 「39 馬麟 芳春雨霽図冊頁」 「40 (伝) 李山 松杉行旅図」 「41 (伝) 江参 林巒積翠図巻」 「42 趙孟頫 水村図巻」 「43 高克恭 雲横秀嶺図」 「44 錢選 山居図巻」 「45 曹知白 群峰雪霽図」 「46

## IX 所員の活動

朱徳潤 林下鳴琴図」「47 唐棣 倣郭熙秋山行旅図」「48 姚廷美 有余間図巻」「49 羅稚川 雪江図」「50 李容瑾 漢苑図」「51 黄公望 富春山居図巻」「52 呉鎮 漁父図」「53 倪瓚 容膝齋図」『東方』(連載)133号～157号 1992年～1994年。

林 秀 薇 りん しゅううゑい

### 1. 略 歴

1961. 1 生, 1984 国立台湾大・文学部卒, 1985 東大大学院人文・外国人研究生, 1987 東大大学院人文・美術史・修士課程入学, 1989 同修了, 1990 同博士課程退学, 同年 東文研助手。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

私は、中国宋元時代の人物画、とりわけ南宋道釈人物画の中心的な画家である梁楷の研究に従事している。梁楷の作品は、早く14世紀から日本に渡来し、現在でも遺品が日本に多く珍藏され、さらに日本の中世の絵画に影響を与えたので、日中両国の美術の交流において極めて重要な画家と言ってよい。

この研究は、日本に伝わっている梁楷の作品への実物の精査を中心に進めている。米国および、台湾を含む中国の梁楷作品をも平等に扱い、よりグローバルな立場から、南宋道釈人物画についての日本側の見解に、梁楷独自の白描的な筆法を見直すことによって新しい視点を加えようと試みている。「梁楷研究——〔黄庭経図巻〕について」(東大大学院修士論文・1989年)と「梁楷研究序説——〔李白吟行図〕から『図絵宝鑑』の梁楷伝記まで」(『東文研紀要』117冊 1992年3月)はこの研究方針に基づいた論文である。

その一方、梁楷の影響を受けた日本のいわゆる漢画系人物画の現存作例を参考にして、中国で失われた種々の南宋道釈人物画を復元的に考察するという日本的な視点を積極的に生かそうともしている。これに基づいて発表した論文「海北友松の袋人物から梁楷の減筆体へ」(1992年5月 東方

学会)は、筆法を中心に画風の系譜づけをする中国流の方法に、形態感による梁楷画風の本質把握を加え、その末流に日本の海北友松を位置づけたのである。

以上の研究経過により、現在は中国絵画の筆法についての諸側面、特に梁楷をはさんで北宋から元代までに至る白描画の諸相をさらに具体的な作例をもとにして分析していこうとしているのである。「趙孟頫〔水村図巻〕における渴筆の使用について」(1993年度・鹿島美術財団賞受賞)は、この研究の論文である。

なお、東洋文化研究所東アジア部門美術研究室は、日本および世界各地のコレクションの中国絵画に関する写真アーカイブの充実をはかり、第二回の中国絵画調査撮影を行うことにした。研究室の一員としてこの調査活動に参加し、1990年のヨーロッパと1991年のアメリカ地域の調査に続いて、1992年に台湾の調査撮影旅行に参加した。その成果を最終的に『中国絵画総合図録』の改訂増補版として公開する予定で、宋元絵画研究のかたわら中国絵画史研究のための工具書の資料蒐集にも努めている。

5. 学外活動(1992. 4～1994. 3)

美術史学会，東方学会。

6. 過去の主要業績(1992. 3まで)

「梁楷研究——〔黄庭経図巻〕について」(東大大学院修士論文)1989；「梁楷研究序説——〔李白吟行図〕から『図絵宝鑑』の梁楷伝記まで」『東文研紀要』117 1992年。

7. 過去2年間(1992. 4～1994. 3)の研究業績

『海外所在中国絵画目録 改訂増補版』(アメリカ・カナダ編 上 本文編，下 索引編)，共編著 東洋学文献センター叢刊 別輯18・19 1994年。



## 南アジア部門

加納 啓良 かのう ひろよし

### 1. 略 歴

1948. 3 生, 1970 東大・経卒, 1971 アジア経済研究所入所(調査研究部), 1976 インドネシア派遣(1978まで), 1980 東文研助教授, 1986 オランダ等出張(1987まで), 1987 インドネシア等出張(1988まで), 1990 経済学博士(東大), 1991 東文研教授。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

ジャワの農村地域を主な対象に、インドネシア経済の歴史と現状を、東南アジアの他の国々、地域や日本などの場合との比較を念頭に置きながら研究を進めてきた。1971年に研究を始めてから最初10年間ほどは、特定村落における現地調査の成果を踏まえてジャワ農村の社会経済構造の現状を、それらの事例に拠りながらできるかぎり精密に記述するモノグラフの作成に研究の重点を置いた。「6. 過去の主要業績」の欄に掲げた『パグララン』、『サワハン』の2点は、この時期の研究活動の主要成果であった。1980年に東文研に赴任してからは、諸種の統計や官庁資料、他の調査報告類をも活用して、1村レベルを越えた、地域全体の面的広がりをもつ鳥瞰的研究にも関心を向け、いくつかの論文を発表した。同上欄に掲げた『インドネシア農村経済論』は、これらの研究成果を1冊の著作にまとめたものである。他方1978年にはフィリピンでの、また1984年にはタイでの科学研究費による共同調査に参加して、国際比較の視野を広げる機会を得た。

以上の現状分析の仕事と並行して、先々19世紀以降の歴史的变化の過程の分析を主な研究対象に据えるための準備作業をも進めたのち、1986年から88年までの合計2年間弱、国際文化会館社会科学フェローシップにより、オランダとインドネシアに研究留学の機会に恵まれた。オランダでは、国立公文書館といくつかの研究所図書室で植民地時代のインドネシア経済史に関する史資料調査を、またインドネシアではかつて調査した村落での追

跡調査と若干の地域での農村史についての現地調査を行った。1990年以降現在まで、この在外研究の成果を複数の論文にまとめる作業を続けている。「6. 過去の主要業績」の欄に示した「ジャワ村落史の検証」、「『地代』制度導入期ジャワ農村の『耕作者』像」「7. 過去2年間の研究業績」の欄に掲げた「ジャワのヨーマンリー? — 農民甘蔗作発展史序説」などが、これまでに発表した主な論文である。また上記在外研究期間には、旧著『パグララン』のインドネシア語版を新たに執筆し、1990年に現地で出版された。

以上は個人研究の概況であるが、1990年からは、科学研究費および三菱財団助成金により、オランダのアムステルダム・アジア研究センター(CASA)およびインドネシアのガジャマダ大学と提携して、中部ジャワ北海岸のチョマル地方での過去約85年間の農村社会経済および政治構造の変化に関する国際共同研究を3年間にわたって実施した。その日本側研究メンバー(加納を代表者とする3名)の成果はすでに、東京大学東洋文化研究所報告『中部ジャワ農村の経済変容』として刊行された。また、オランダ側、インドネシア側の研究成果を含む英語およびインドネシア語の報告書の刊行についても準備を進めている。

### 3. 教育活動(1992. 4~1994. 3)

東京大学教養学部教養学科 東南アジア近代史 1992・93年度、東京大学大学院経済学研究科 経済史専攻指導 1992年度、経済史演習 1993年度、千葉大学教養学部 東南アジア地域研究 1992年度、埼玉大学教養学部 国際関係論C 1993年度。

### 4. 学内行政事務分担(1992. 4~1994. 3)

経済学研究科委員会(1993年10月~ )。

### 5. 学外活動(1992. 4~1994. 3)

アジア政経学会(理事)、東南アジア史学会、国際開発学会、東アジア経済学会、日本インドネシア NGO ネットワーク(JANNI) 代表。

### 6. 過去の主要業績(1992. 3まで)

## IX 所員の活動

『パグララン — 東部ジャワ農村の富と貧困』アジア経済研究所 1979年；  
『サワハン — 「開発」体制下の中部ジャワ農村』アジア経済研究所 1981  
年；『インドネシア農村経済論』勁草書房 1988年；「ジャワ村落史の検  
証 — ウンガラン郡のフィールドから」『東文研紀要』111 1990年；「『地  
代』制度導入期ジャワ農村の『耕作者』像 — マラン県『詳細査定簿』の  
分析」『東文研紀要』118 1992年。

### 7. 過去2年間（1992. 4～1994. 3）の研究業績

「チョマル・プロジェクト — 日蘭イ三国共同による現代ジャワ農村史の総  
合研究」『東南アジア — 歴史と文化』21 1992年；「ジャワ村落と導入期  
『地代』制度 — 東部ジャワ・マラン県における展開」石井米雄ほか編著『東  
南アジア世界の歴史的位相』東京大学出版会 1992年；“The Reorienta-  
tion of Indonesia's Centralized Budgetary System,” *The Developing  
Economies* 30-4, 1992；「日本・インドネシア経済関係の構造と NGO 交流  
の課題」INGI 神奈川シンポジウム実行委員会編『“開発”をひらく — 草  
の根から見たインドネシアの開発と日本』日本インドネシア NGO ネット  
ワーク 1993年；「中部ジャワ農村経済の構造変容 — サワハン区再調査  
から」梅原弘光・水野広祐編『東南アジア農村階層の変動』アジア経済研  
究所 1993年；「ジャワの労働人口の将来 — 労働力」「増えた自動車」宮  
崎・山下・伊藤編『暮らしがわかるアジア読本 インドネシア』河出書房  
新社 1993年；「ジャワのヨーマンリー？ — 農民甘蔗作発展史序説」秋  
元・廣田・藤井編『市場と地域 — 歴史の視点から』日本経済評論社 1993  
年；『中部ジャワ農村の経済変容 — チョマル郡の85年』（編著）東文研叢  
刊（東京大学出版会）1994年。

柳澤 悠 やなぎさわ はるか

### 1. 略 歴

1944. 11生, 1967 東大・経卒, 1970 東大大学院経済・応用経済学・修士  
課程修了, 1972 同博士課程退学, 同年 横浜市大文理部学部専任講師,

1976 同助教授, 1983 東文研助教授, 1989 同教授, 1993 博士 (経済学 東大)。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

南インドを主たる対象として, 近現代インド経済史を研究してきた。研究は, 農業・農村構造の変化に関するものと, 在来手工業や農村小工業に関するものを中心とし, 1930年代の日印会商や労働市場についても若干の検討を行った。

農業・農村構造の変化については, マドラスの州政府公文書館所収の政府公文書の分析, 村落土地台帳 (約60村分) の電算機への入力 (水島司氏と共同で作業) と分析, 村落の現地調査 (1979~82年) を通じて, 19世紀後半以降1980年代までの変化を解明しようとしてきた。この中で特に注目してきたことは, 村落の下層社会を構成する「不可触民」などの階層が19世紀後半以降次第に自立性を強めてくる過程である。植民地支配期のインド経済史に関しては, イギリス植民地支配による農村社会の分解と土地無し貧困層の創出を主張するナショナリスト的な通説と, それを批判する実証的研究との二つの立場があったが, 農村下層民の自立化と彼らの小作人への上昇・零細土地所有者化の過程を把握することによって, 従前の対立する二つの見解を統一的に把握できると考えている。1991年刊行の『南インド社会経済史研究』は, 以上の研究をまとめたものである。

インド在来手工業や農村小工業については, 1989年に文部省科学研究費による海外調査を組織し, 南インド中小都市の手織業について現地調査と公文書館史料収集を行った。本研究では, 農村下層民の自立化の進展と彼(女)らの消費に関する社会的規制の弱化的結果, 下層社会に人絹織物・絹織物や米・砂糖などへの需要が形成され, それが手織業の残存・発展や1920年代以降の農村小工業拡大の一要因であろうという仮説を提出した。また, 1991年には, 文部省科学研究費調査隊の一員として, 東インドのグジャラート州の村落手工業調査を行った。

1992年7月には, ロンドンでロンドン大学 SOAS と共同してインド経済

## IX 所員の活動

史セミナーを開催し、その成果の論文集は1994年に刊行されることになっている。

### 3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

東京大学大学院経済学研究科応用経済学専攻 アジア農村社会の変容  
1992・93年度、東京大学大学院総合文化研究科地域文化専攻 アジア地域  
文化構造論特殊研究 1993年度、東京大学経済学部 低開発経済 1992年  
度、東京大学教養学部 南アジア近代史 1993年度、横浜国立大学教育学  
部 東洋史特殊講義 1993年度。

### 4. 学内行政事務分担 (1992. 4～1994. 3)

情報ネットワークシステム建設推進委員会(1992年4月～1993年3月)、経  
済学研究科委員会 (1992年4月～1992年9月)。

### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

日本南アジア学会(常務理事)、土地制度史学会、社会経済史学会、歴史学  
研究会、アジア政経学会、国際経済学会。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

*Socio-Economic Changes in a Village in the Paddy Cultivating Area in  
South India*, 1985; 共著『20世紀初め南インドにおけるカーストと土地  
保有構造の変動——ティルチラパッリ県22ヶ村の村落地税台帳分析』1988  
年; “Mixed Trends in Landholding in Lalgudi Taluk: 1895-1925,”  
*Indian Economic and Social History Review* 26-4, 1989; 『南インド社会  
経済史研究——下層民の自立化と農村社会の変容』東文研報告(東京大学  
出版会) 1991年; 「植民地期南インド手織業の変容と消費構造」『東文研  
紀要』118 1992年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

*Economic Change and Social Transformation in Modern and Contem-  
porary South Asia*, Part 1, Co-edited with S. Taniguchi et. al., Hitotuba-  
shi University, Tokyo, 1993; *Local Agrarian Societies in Colonial  
India: Japanese Perspectives*, Co-edited with P. Robb, & K.Sugihara,

1994 (forthcoming); “The Handloom Industry and Its Market Structure: The Case of the Madras Presidency in the First Half of the Twentieth Century,” *Indian Economic and Social History Review* 30-1, 1993; “Diversification of Jobs in Rural Lower Classes: The Report of a Survey in Ahmedabad,” in *Economic Change and Social Transformation in Modern and Contemporary South Asia*, Part 1, Hitotubashi University, Tokyo, 1993; “Elements of Upward Mobility among Agricultural Labourers: Tamil Districts, 1865-1925”&“A Comparison with the Japanese Experience,” in *Local Agrarian Societies in Colonial India: Japanese Perspectives*, 1994 (forthcoming); 「南アジアの伝統社会と経済」『アジア諸国の宗教・社会と経済発展に関する調査研究』アジア社会問題研究所 1993年；「イギリス綿布と村の手織工」辛島昇編『ドラヴィダの世界—南インドの歴史的風土』東京大学出版会 1994年。

上村 勝彦 かみむら かつひこ

## 1. 略 歴

1944. 3 生, 1967 東大・文・仏文卒, 1970 東大大学院人文・印哲・修士課程修了, 1971 同博士課程退学, 同年 東大文学部助手, 同年 インド国・マドラス大留学, 1973 帰国, 同年 東大文学部助手退職, 同年 財団法人東方研究会専任研究員, 1978 国学院大文学部専任講師, 1980 同助教授, 1986 東文研助教授, 1988 文学博士 (東大), 1989 同教授。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

最近の研究活動は主として二つの領域に分類され得る。第一は、修士論文以来続行して来たサンスクリット詩論に関する研究である。南インドのマドラスに滞在中に着手したラサ (美的陶醉) の理論の研究は、博士論文『インド古典演劇論における美的経験』として結実し、1990年に東洋文化研究所 (東京大学出版会) から出版された。アーナンダヴァルダナの詩論書『ドゥヴァニ・アーローカ』の翻訳は完了し、目下その研究に従事している。

## IX 所員の活動

第二は、叙事詩『マハーバーラタ』の翻訳である。目下、その第三巻を訳出している。

### 3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

東京大学教養学部 古典語初級 1993年度, 東京大学人文系大学院印度哲学 サンスクリット文学購読 1992・93年度。

### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

日本印度学仏教学会 (評議員), 日本仏教学会, 仏教思想学会 (評議員), 日本南アジア学会, インド思想史学会(理事), 東京大学仏教青年会(理事)。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

訳『屍鬼二十五話』東洋文庫325 1978年; 『インド神話』東京書籍 1981年; 訳『カウティリヤ実利論』(上下) 岩波文庫 1984年; 『インド古典演劇における美的経験——アビナヴァグプタの rasa 論』東文研報告 1990年; 訳『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫 1992年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

『ニーティサーラ』東洋文庫553 平凡社 1992年; 『インドの夢インドの愛 (サンスクリット・アンソロジー)』(共編著) 春秋社 1994年; 「バガヴァッド・ギーターの世界」『仏教』19 法蔵館 1992年; 「Ānandavardhana 作 Dhvanyāloka 訳注 (第3章-2)」『東文研紀要』119 1992年; 「ĀnandavardhanaのBhagavadgītā 注」『東洋文化』73 1993年; 「Ānandavardhana 作 Dhvanyāloka 訳注 (第4章)」『東文研紀要』122 1993年。

永ノ尾 信悟 えいのお しんご

### 1. 略 歴

1948. 7 生, 1971 京大・文・哲学卒, 1973 京大大学院文学・梵語学梵文学・修士課程修了, 1976 同博士課程退学, 同年 学術振興会奨励研究員 (1977まで), 1977 西ドイツ・マールブルク大博士課程入学, 1980 同退学, 同年 九州東海大工学部教養課程専任講師, 1984 国立民族学博物館助手, 1986 哲学博士 (Ph.D. マールブルク・フィリップス大), 1987 同

助教授，1989 総合研究大学院助教授併任，1991 東文研助教授，1994 同教授。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

修士課程在学中より始めた古代インドのヴェーダ祭式研究は1988年に出版した *Die Cāturmāsya oder die altindischen Tertialopfer* に集大成された。その間、ヴェーダ祭式文献の中に見い出される意味不明な語に関する語彙研究や、ヴェーダ祭式解釈文献に特有な論理展開に関する研究を内外の学術雑誌に発表したり、当時の東ドイツ、更にオーストリア、合衆国など内外の学術大会においても発表してきた。1984年から1991年まで国立民族学博物館に勤務したが、その間6回インドに滞在する機会を得た。そのうち3回親しくなった友人のいるビハール州北部のミティラー地方の農村を訪問し、そこで行われるバラモン達の伝統的な宗教儀礼をいくつか見ることができた。現在のインドに伝わっている彼らバラモン達の儀礼は、私が長年文献のみで研究してきた古代インドのヴェーダ祭式とかなり異っていることがわかる。インドの祭式儀礼研究はインド文献学においてあまり大きな関心をもたれてこなかった。ヴェーダ祭式研究はしかし、そのような状況の中でも比較的多くの研究者が研究対象としてきたといえるが、ヴェーダ文献の最新層の文献から徐々に散見され、膨大なプラーナ文献を中心に展開し、現在にまで伝えられることになるヒンドゥー儀礼の変遷を文献学的に解明する作業はほとんどなされていないと思われる。インド滞在中に見ることができた現在のバラモン達の宗教儀礼の実際の在り方を出発点とし、それらが要素的に、古代インドの文献のどこまでさかのぼることができるのか、そもそもヴェーダ祭式が徐々に変容し、ヒンドゥー儀礼はどのようなプロセスを経て展開していったのかという問題を、文献を手掛りに現在解明している。その糸口として、朝夕に行われる日々の勤行や祖霊に対して行われる祖霊祭、それに、1年の儀式カレンダーに従って行われる定期的な宗教儀礼などを検討している。ヒンドゥー的宗教慣行の中でヴェーダ祭式になかったものに更に聖地巡礼というものがある。聖地巡礼



## IX 所員の活動

に関する最初期の記述はマハーバーラタに見られるが、それを始めとするいくつかの文献により、ヒンドゥー教における聖地巡礼の萌芽とその展開に関する検討も行っている。

### 3. 教育活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

東京大学人文科学研究科・印度哲学印度文学専攻 印度祭祀文献研究  
1992・93年度。

### 5. 学外活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

日本印度学仏教学会, 日本南アジア学会, 日本民族学会。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3 まで)

“*Studien zum Śrautaritual I, II.*” *Indo-Iranian Journal* 25-1・28-4 1983・85; “Textkritische Bemerkungen zum Cāturmāsya-Abschnitt des Vārāha-Śrautasūtra,” in W. Morgenrot, ed., *Sanskrit and World Culture* 1986; *Die Cāturmāsya oder die altinsischen Tertialopfer. Dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und der Śrautasūtras* 1988; 「Mahādevapūjā — Mithilā 地方の事例報告」『国立民族学博物館研究報告』14—2 1989年; 「グリフヤーストラ文献にみられる儀礼変容」『東文研紀要』118 1992年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4 ~ 1994. 3) の研究業績

「ヒンドゥー儀礼の変容 — 朝の勤行を例として」長野泰彦, 井狩弥介編『インド=複合文化の構造』法蔵館 1993年; 「プラーナ文献が記述する秋の女神の大祭」『東洋文化』73 1993年; “Changes in Hindu Ritual: With a Focus on the Morning Service,” in Yasuhiko Nagano and Yasuke Ikari eds., *From Vedic Altar to Village Shrine (Senri Ethnological Studies 36)*, National Museum of Ethnology, Osaka. 1993; “Who is the performer of the Saṃdhyopāsana?,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* XXXVI/Supplementband, 1992; 書評 “Howard, Wayne: The Decipherment of the sāmavedic Notation of the Jaiminīyas, Helsinki: [Finnish Oriental Society] 1988. XV, 330 S. gr. 8. = Studia

Orientalia, ed. by the Finnish Oriental Society, 63. Kart," *Orientalistische Literaturzeitung* 87, 1992.

小倉 泰 おぐら やすし (1994. 3 退職)

## 1. 略 歴

1959. 9 生, 1982 東大・法卒, 1984 東大大学院人文・比較文学・修士課程修了, 同年 東大大学院総合文化・比較文化・博士課程入学, 1986 インド国・プーナ大留学 (1988まで), 1989 東大大学院博士課程退学, 同年 東文研助手, 1994 同助手退職 同年 東海大学文学部助教授。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

ヒンドゥー教世界における空間の観念を様々な角度から検討することを課題にして, ヒンドゥー寺院の建築儀礼の象徴的意味や, 平面設計と宇宙観との関わりなどについて考察してきた。現在は研究の範囲を, 一方で, 神像彫刻の制作における比例寸法の考え方, 他方で都市空間に広げ, 人体から個々の建築, さらに都市にいたる空間が, ヒンドゥー教の宇宙論とどのように関連づけられるかを明らかにしようとしている。以上の作業の結果をまとめたものとして, 『ヒンドゥー教世界の空間観念 (仮題)』の刊行を準備中である (春秋社)。

その他の仕事としては, フランスの社会学者ルイ・デュモンの『インド文明とわれわれ』(みすず書房)と, サンスクリット叙情詩『ギータゴーヴィンダ』(平凡社東洋文庫)を翻訳し, 近々刊行の予定である。一方, 文部省重点領域研究(「イスラームの都市性の比較研究」板垣雄三氏代表)の研究分担者(1990年度)として, インドにおけるヒンドゥー都市の研究を分担した。

海外学術活動としては, 1990年度から93年度まで, 科学研究費海外学術調査(「イスラーム都市における空間構成の比較研究」羽田正氏代表)の研究分担者として, モスクについての調査を行なった(1990年度; インド, 1991年度; モロッコ, 1992年度; イスラエル, トルコ, シリア, 1993年度;

## IX 所員の活動

チュニジア)。また、1991年度から、科学研究費国際学術研究（「古代中世東南アジアとインドとの間の文化交流の再検討」辛島昇氏代表）の研究分担者として、ヴェトナム、ラオス、マレーシア、タイ、インドネシアなどにおけるヒンドゥー寺院について、インドの研究者と共同で現地調査を行っているほか、1994年2月には、南インドのガンガイコンダチョーラプラム遺跡の調査を行った。また、1991年8月から（1992年6月まで）、米国ペンシルヴァニア大学に客員研究員として所属して、研修を行った。

### 5. 学外活動（1992. 4～1994. 3）

日本印度学仏教学会、美術史学会、日本南アジア学会、American Oriental Society、日本比較文学会、東大比較文学会。

### 6. 過去の主要業績（1992. 3まで）

「お地蔵さんとこども一ひとつの文化変容」『比較文學研究』48 1985年；  
「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性(1) Pādma Samhitāにおける寺院建築の過程と儀礼」『東文研紀要』111 1990年；「南インドのヒンドゥー寺院の象徴性(2) Vāstupuruṣamaṇḍala と寺院の平面設計」『東文研紀要』115 1991年；「タミル・ナードゥにおける王権と寺院一王の神格化をめぐって」『東文研紀要』118 1992年；「中世都市ヴィジャヤナガルーヒンドゥー王都のレイアウトとその解釈」『東洋文化』72 1992年。

### 7. 過去2年間（1992. 4～1994. 3）の研究業績

ルイ・デュモン『インド文明とわれわれ』（訳）みすず書房（刊行予定）；  
ジャヤデーヴァ『ギータ・ゴーヴィンダ』（訳）平凡社〈東洋文庫〉（刊行予定）；「南インドヒンドゥー彫刻のプロポーション——いわゆる儀軌文献の規定と実際」『東洋文化』73 1993年；「ヒンドゥー寺院とヴァーストウシャーストラ」「ギータ・ゴーヴィンダと細密画の世界」上村勝彦・宮本啓一共編『インドアンソロジー』春秋社 1994年；「王権の神格化と大寺院の建立—チョーラ朝の試み」辛島昇編『インド入門2—ドラヴィダの世界』東京大学出版会 1994年；“Formation of the Tālamāna System-Iconometry of South Indian Sculpture,” *The Memoirs of the Institute of*

*Oriental Culture* 124, 1994; 「ヒンドゥー建築」平凡社編集部編『南アジアを知る事典』平凡社 1992年; 「聖山メールと中心のシンボリズム」『IS』59 1993年。

## 西アジア部門

鈴木 董 すずき ただし

### 1. 略歴

1947. 9 生, 1970 東大・法卒, 1972 東大大学院法学・政治・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 同年 トルコ国・イスタンブル大留学 (1975 まで), 1979 東大大学院博士課程退学, 同年 学術振興会奨励研究員, 1980 立大法学部助手, 1982 同退職, 同年 千葉大学教養部等非常勤講師, 同年 東大大学院法学・政治・博士課程修了, 法学博士 (東大), 1983 東文研助教授, 1991 同教授。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

現在, 方法的関心の中心は政治社会史にあり, 研究対象は, かつてのオスマン帝国を中心とする西アジア地域である。研究テーマとしては, オスマン帝国のケースを中心に, イスラム世界における 1) 国家の支配組織と支配エリート, 2) 世界秩序・政治的統合・アイデンティティ, 3) 文化と社会の特質, の三分野にわたっている。

そのうち, 最も中心をなすのは1である。前近代オスマン帝国の支配組織と支配エリートについては, 大学院在学中からトルコ留学をへて今日に至るまで, 研究を続けてきた。この分野での研究は, 一応, 1982年の博士論文 (未刊) でまとめられた。その後, 新史料を加え検討を進め, その結果の中間報告としては, 邦文では, 『オスマン帝国の権力とエリート』(1993年)を刊行した。また, 外国文でも, 従来 of the Ottoman Empire” (1989年) 等として公表した。

巨視的分析の実証的基礎としての, 文献学的考証に基づくプロソポグラフ

## IX 所員の活動

ィー的研究の一部は、「スレイマン大帝時代の大宰相と宰相たち(一)~(三)」（1986~8年）等として刊行した。また『トルコ社会経済史国際会議』（イスタンブル，1989年）の報告書中でのトルコ語論文，および『トルコ歴史学会議』（アンカラ，1990年）でのトルコ語口頭発表もある。

支配エリートの組織観の変遷については、「後期オスマン帝国における没落観と改革論」（1992年）があり，のち『オスマン帝国の権力とエリート』に，収載した。

2のテーマについては，前近代イスラム世界における世界秩序観，政治的統合とアイデンティティーの特質と，近代西欧の衝撃下でのその変化について，「中東イスラム世界に於ける国際体系の伝統と西洋の衝撃」（1982年）以下，一連の巨視的試論を発表してきた。成果として，前述の諸論考を中心に，新たな書き下しも加えて，『イスラムの家からバベルの塔へ—オスマン帝国における諸民族の統合と共存』（1993年）として一応，集約した。世界秩序観のより制度化された形態についての検討の一端は「一八世紀初頭オスマン帝国の遣欧使節制度と『使節の書』」（1989年）で示した。

第3の分野である文化と社会の特質については，主としてオスマン都市，特に帝都イスタンブルに焦点をすえて，研究を進めつつある。この方面での研究では，友杉教授の班研究「アジア都市比較の課題と方法」の共同研究，および板垣教授の重点領域研究「イスラムの都市性」研究プロジェクトにより研究上の知見を拓げることを得た。この方面での研究の最近の成果の一端としては，「チューリップ時代のイスタンブルにおける詩人と泉」（1992年）がある。また，図版を多くとり入れ一般書の体裁をとったイスタンブルの都市文化社会誌(史)として，『図説イスタンブル歴史散歩』（1993年）を刊行した。

### 3. 教育活動（1992. 4~1994. 3）

東京大学大学院法学政治学研究科 イスラム伝統国際秩序研究 1992年度，中東政治 1993年度，東京大学大学院人文科学研究科 トルコ・イスラム研究 1992・93度，地中海都市論 1993年度，東京大学大学院総合文

化研究科 現代イスラム論 1992年度, 現代アジア論 1993年度, 東京大学法学部(大学院と共通) 特別講義 中東の政治 1993年度, 東京大学教養学部教養学科 アジアの政治変動 1992年度, 京都大学法学部 イスラム政治社会論 1993年度, 神戸大学大学院人文科学研究科 アジア古代史研究論 1993年度, 横浜市立大学大学院国際文化研究科 東西交渉史 I, II 1993年度, 慶応大学大学院文学研究科 東洋史特講演習 1992年度, 慶応大学文学部 東洋史特殊 I 1992年度, 上智大学外国語学部 イスラム政治文化論 1992年度, 成蹊大学法学部 アジア研究3 1992年度。

4. 学内行政事務分担 (1992. 4 ~ 1994. 3)

図書行政商議会 (1992年 4月 ~ ), 法学政治学研究科委員会 (1992年 4月 ~ )。

5. 学外活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

日本オリエント学会 (『オリエント』編集委員), 日本中東学会 (評議員『日本中東学会年報』編集委員), 地中海学会 (常任委員, 『地中海学研究』編集委員), 日本国際政治学会 (評議員), 比較法史学会 (理事)。

6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「後期オスマン帝国における没落観と改革論」『東文研紀要』118 1992年;  
「チューリップ時代のイスタンブルにおける詩人と泉」『東洋文化』72 1992年。

7. 過去2年間 (1992. 4 ~ 1994. 3) の研究業績

『オスマン帝国—イスラム世界の柔らかい専制—』講談社現代新書 講談社 1992年;  
『フランス革命と周辺国家』(共編著) リプロポート 1992年;  
『図説 イスタンブル歴史散歩』河出書房新社 1993年;  
『オスマン帝国の権力とエリート』東京大学出版会 1993年;  
『イスラムの家からバベルの塔へ—オスマン帝国における諸民族の統合と共存』リプロポート 1993年;  
『イスラームの世界史』全3巻(共編著) 講談社現代新書 講談社 1993年;  
「イスラーム世界の書物と図書館」『地中海文化研究報告』4 1992;  
「アナール派不朽の名著—地中海世界を統一把握」『書評集—『地中海』』藤

## IX 所員の活動

原書店 1992年；「祝祭と革命のイスタンブール—オスマンの歴史が展開された広場」『週刊朝日百科』『旅の世界史』8 1992年；「紹介—羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究〔歴史と展望〕』」『オリエント』35-1 1992年；「Süleymaniye Library—イスタンブール」『東京大学総合資料館ニュース』26 1992年；「帝都イスタンブールとオスマン権力」板垣雄三・後藤明編『イスラームの都市性』学振新書 日本学術振興会 1993年；「イスラム帝国としてのオスマン帝国」『国際交流』61 1993年；「イスラム世界におけるアイデンティティの構造」原洋之介編『アジア諸国の宗教・社会と経済発展に関する調査研究』1993年；「イスラム的世界秩序と共存問題」『創文』346 1993年；「イスラム世界・オスマン帝国・世界地図」『世界史のしおり—特集世界史と地図帳 その2』帝国書院 1994年；「オスマン語をめぐって—多言語帝国としてのオスマン帝国と言語的共存」『史学』63-3 1994年。

松谷 敏雄 まつたに としお

### 1. 略 歴

1937. 3 生, 1961 東大・教養・教養卒, 1963 東大大学院生物・人類学・修士課程修了, 1965 同博士課程退学, 同年 東文研助手, 1971 同退職, 同年 東大教養学部非常勤講師, 1972 埼玉大教養学部非常勤講師, 同年 東文研専任講師, 1974 同助教授, 1984 同教授, 1992 東文研所長及び東大評議員並びに東洋学文献センター長(1994まで)。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

関心は今から一万年ほど前にメソポタミアの地でおこった、農耕や牧畜という食料生産経済の開始と、その新しい経済に基礎を置く農耕村落の初期の様相にある。これを研究するために、イラン・イラク・シリアの3か国で遺跡の発掘調査によって情報を集めてきた。

最初に参加した1964年の調査の際、幸いなことに、イラクのテル・サラサート遺跡第2号丘の最下2層 XV, XVI 層でハッスーナ Ia 期の文化を

掘ることができた。当時この文化層の文化史的な位置づけは十分になされていたとはいえない。これを、より高度の高いカシ=ピスタチオ疎林地帯で野生植物の栽培化に成功した人々が、野生種は分布していないが天水農耕の可能なアッシリアン・ステップに降りてきて形成した最初の農耕村落の文化という見通しを立てたのである。

その後、イギリスのウム=ダバギーヤ遺跡、ソ連のヤリム・テペI号丘、テル・ソット遺跡の発掘調査によって、この見通しが正しいものであることが補強された。そこで、テル・サラサート遺跡第2号丘でさらなる情報収集の必要性が生じた。1976年に、同遺跡の再調査を行い、当時の村落の様相を明らかにした。

イラクの考古当局のダム建設に伴う水没地の遺跡の発掘以外は発掘調査を許可しない方針、またイラン・イラク戦争の勃発によってイラクでの現地調査は中断された。戦争の終結を待ち望んでいたが、なかなか終焉しそうにないため、調査地をシリアに切りかえることにした。1984年のことである。

1985年の夏休みを利用してシリアに赴いた。シリアでも水没地の遺跡発掘を優先していた。幸運なことに、水没地の遺跡のなかにハッスーナIa期の文化層を持つとみなされるテルが見つかった。カシュカショクII号丘である。1987・88の両年の発掘によって、この遺跡に当時の文化層が横たわっていることを確認した。東北シリアでハッスーナIa期の遺跡が発掘されたのは、これが初めてのことであり、シリアばかりでなく他の国の研究者に大きな刺激を与えた。

その後、フランス隊の分布調査によって、この時期の文化層を包含する遺跡が次々とみつかった。これからは、これらの遺跡のいくつかを発掘し、東北シリアにおけるハッスーナIa期の文化の様相を明らかにしていきたいと考えている。

1993年秋シリアへ赴き、ユーフラテス川流域のテル・コサックを次の調査地として選定し、発掘許可申請をしてきた。幸い許可もあり、1994年か



## IX 所員の活動

ら本格的な調査をすすめたい。

### 4. 学内行政事務分担 (1992. 4～1994. 3)

評議会 (1992年4月～1994年3月), 埋蔵文化財運営委員会 (1992年4月～1994年3月), キャンパス委員会 (1992年4月～1994年3月), 教官の倫理に関する特別委員会 (1992年4月～1994年3月), 放射性炭素年代測定装置委員会 (1992年4月～ )。

### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

日本民族学会, 日本オリエント学会 (理事), 日本学術会議・東洋学連絡委員会委員, 古代オリエント博物館評議員, 流沙海西奨学会運営委員長。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「初期農耕村落」『東文研紀要』47 1967年; 「ピゼとチネ」『東文研紀要』58 1972年; 編 *Telul eth-Thalanthat* 東文研報告 III—IV 1975～81年; 共編 *Halimehjan* 東文研報告 I—II 1980～82年; *Tell Kaskashok: The Excavations at Tell, No. II*, 1991。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

「カシュカシヨクII号丘のP9は竪穴住居であったらうか」『オリエント』36-2, 1993年; 監訳『古代のメソポタミア』朝倉書店 1994年(印刷中)。

## 羽田 正 はねだ まさし

### 1. 略 歴

1953. 7生, 1976 京大・文・史学卒, 1978 京大大学院文学・東洋史・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 1980 フランス国・パリ第3大留学, 1983 イラン学第3期博士(パリ第3大), 同年 帰国, 1984 京大大学院博士課程退学, 同年 学術振興会奨励研究員(1985まで), 1985 京大文学部研修員(同年9月まで), 同年 学術振興会特別研究員, 1986 京都橘女子大助教授, 1989 東文研助教授。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

統一的であると同時に多様性をも有するイスラム世界の中で, 特に前近

代イラン・イスラム世界を研究対象とし、歴史上の様々な局面に見られるその特徴を抽出、解明することに努めてきた。

研究の第一段階（1978～87年）では、サファヴィー朝国家（16～18世紀）の有したトルコ・モンゴル系遊牧民的な特徴に着目し、従来の「サファヴィー朝国家の成立＝イラン民族王朝の成立」という歴史理解を再検討した。いくつかの論文がこのために著わされたが、シャー・アッバースの改革の評価をも含めた最終的な結論は、パリ第三大学に学位請求論文として提出され、1987年に出版された（*Le chah et les Qizilbāš*）。

研究の第二段階は、都市とその社会に見られるイラン・イスラム世界的な特徴を検証することにあてられている。伝統的にイラン社会で強い影響力を持っていた都市名家の活動を、国家権力との関わりの中であとづけること、トルコ・モンゴル系の遊牧君主がイニシアティブを持って推進した庭園（バグ）を重視する都市プランの実際とその系譜を明らかにすること、これらを総合して前近代イラン都市の特徴を明らかにすることなどが現在の中心的な研究テーマである。また、その過程で、従来の研究史を整理することが必要となり、イスラム世界の他地域を専攻する研究者との共同作業を行った結果、従来のヨーロッパ的な「イスラム都市」研究の持つ方法論的な問題点を明らかにすることもできた（『イスラム都市研究』1991年）。

これまでの研究が主として文献史料に基づき、広義のイラン文化圏を対象とするものだったのに対し、1990年度からは、文部省の科学研究費補助金を得て、現地調査をも積極的に実施し、研究の幅を広げることを試みている。具体的には、庭園やモスク、マドラサを実際に目で見て、建築様式の発展や変化を追い、その都市社会との関わりかたを調査・考察すること、イスラム世界内部における歴史的な意味での複数の地域の存在の確認と、それぞれの地域文化の特徴を明らかにすることなどである。このため、93年度までの調査は、イラン世界を意識しながらも、アラブやトルコ、インド世界にも目を配ったものであり、これらの地域の専門家や建築学者と共

## IX 所員の活動

同で行われている。この調査とそれに伴う一連の研究活動により研究は第三段階に入ったと言える。

### 3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

東京大学大学院人文科学研究科東洋史学 イラン・イスラム文化研究  
1992・93年度, 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究 アジアの思想・宗教, 地域文化研究特別研究 1992年度, アジア地域文化相関論特殊研究, 地域文化研究特別演習 1993年度, 東京外国語大学大学院地域文化研究科 アジア歴史文化論Ⅲ 1992・93年度, 慶応義塾大学文学部 東洋史学特殊講義Ⅰ 1992年度, 東京大学文学部 イスラム史演習 1993年度, 京都大学文学部 西南アジア史学特殊講義 1993年度。

### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

日本中東学会 (評議員・1992年度『年報』編集委員), 日本オリエント学会 (欧文『オリエント』編集委員), 史学会 (評議員・『史学雑誌』編集委員), 日本イスラム協会, 東方学会, 東洋史研究会, 史学研究会, 西南アジア研究会, 日仏東洋学会 (評議員・会計担当幹事), *Société asiatique, Association pour l'avancement des études iraniennes, Centre d'études islamiques et orientales d'histoire comparée (U.R.A. 1059, CNRS)*。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

*Le châh et les Qizilbâš. Le système militaire safavide*, 1987; “La famille Hūzānī d' Isfahan (15<sup>e</sup>-17<sup>e</sup> siècles),” *Studia Iranica* 19-1, 1989; 「牧地都市と墓廟都市—東方イスラム世界における遊牧政権と都市建設」『東洋史研究』49-1 1990年; 「イスラム都市研究」 1991年; 「1676年のイスファハーン—都市景観復元の試み」『東文研紀要』118 1992年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

『モスクが語るイスラム史—建築と政治権力』中央公論社 1994年; 「イラン・イスラーム世界の都城—イスファハーンの場合」『学術月報』45-5 1992年; 「シャルダン『ペルシア旅行記』の特徴」『シャルダン ペルシア紀行』岩波書店 1993年; 「東方イスラム世界の成立と発展」鈴木董編『パ

クス・イスラミカの世紀』講談社 1993年。

山中 由里子 やまなか ゆりこ (1993. 4 採用)

## 1. 略 歴

1966. 1 生, 1988 米国・カラマズー大学・仏語／美術卒, 1991 東大大学院総合文化・比較文学比較文化・修士課程修了, 同年 東大大学院総合文化・比較文学比較文化・博士課程入学, 1992 学術振興会特別研究員 (1993 まで), 1993 東大大学院総合文化・比較文学比較文化・博士課程退学, 同年 東文研助手。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

中東イスラム世界における「アレクサンドロス物語」の伝播と変容を研究課題としている。修士論文「都市の誕生と死——アレクサンドロス伝説におけるアレクサンドリアとペルセポリス」では、「偽カリステネスのアレクサンドロス・ロマンス」と呼ばれる、ヨーロッパ、北アフリカ、中近東、東南アジアに広く伝播したアレクサンドロス大王にまつわる伝説的物語を都市という観点から捉え、アレクサンドリアの創建とペルセポリスの焼盡の場面が、まず歴史の中で、そして伝説の中でそれぞれどのように描かれているかを探り、これらの場面が古今東西のアレクサンドロス像の形成にどうかかわっているかを考察した。その後、学術振興会特別研究員として、イランにおける「アレクサンドロス物語」の受容について研究し、その成果は英文の論文にまとめ『日本中東学会年報』に発表した。この論文では、征服者アレクサンドロスへの敵対心が最も色濃く残っていたイランにおいて、「アレクサンドロス物語」受容とイスラム教の浸透とともに、アレクサンドロス像が邪悪な破壊者から、イラン人の血を引いた正統な王となり、さらにはイスラム的英雄となってゆく過程を、ササン朝から13世紀初めにいたるまでの文学作品の中に追った。

現在、ペルシア語で書かれた「アレクサンドロス物語」の様々な異本——宮廷詩人の作品から、民間伝承に近い散文作品まで——の調査を行ってお

## IX 所員の活動

り、各作品の時代的背景を考慮した上でそれぞれの特徴を把握し、外来の物語と土着の民話・伝説の体系の相関について考察している。また「アレクサンドロス物語」そのものの分析に加えて、アレクサンドロスという外来の英雄がイスラム的コンテクストの中にどのように受け入れられてきたかという問題をも、ペルシア語・アラビア語の歴史書、地理書、旅行記、宗教書、倫理書等に含まれるアレクサンドロスに関する記述に広く探ろうとしている。中世ヨーロッパのキリスト教世界におけるアレクサンドロス物語に関する研究書も随時参照してイスラム世界の場合と比較し、「アレクサンドロス物語」を材料として、文明圏同士の接触、交流について考えたいと思っている。

### 5. 学外活動 (1992. 4 ~ 1994. 3)

東大比較文学会，日本比較文学会，国際比較文学会，日本中東学会，日本オリエント学会。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3 まで)

「美術史家としてのアーサー・ウェーリー——郭熙『林泉高到集』のフェノロサ訳及びウェーリー訳をめぐって『比較文学研究』59 1991年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4 ~ 1994. 3) の研究業績

「都市の誕生と死——アレクサンドロス伝説におけるアレクサンドリアとペルセポリス (上) (下)『比較文学研究』61-62 1992年； 「明治日本人のペルシア体験——吉田正春使節団を中心に」『比較文学』35 1993年； “From Evil Destroyer to Islamic Hero: The transformation of Alexander the Great's image in Iran”『日本中東学会年報』8 1993年； 書評「杉田英明著『事物の声 絵画の詩』(平凡社 1993年)」『比較文学』36 1994年； 英文著書紹介 “Hideaki Sugita, *Voices of Objets: Poetry of Painting* (杉田英明著『事物の声 絵画の詩』平凡社 1993年)”『日本中東学会年報』9 1994年； 訳 エドウィン・マクレラン「『こころ』の翻訳について」平川祐弘・鶴田欣也編『漱石のこころ』新曜社 1992年。

後藤 明 ごとう あきら

## 1. 略 歴

1941. 7 生, 1965 東大・文・東洋史卒, 1967 東大大学院人文・東洋史・修士課程修了, 同年 東洋文庫研究生, 1968 同附置ユネスコ東アジア文化研究センター研究員, 1978 山形大人文学部助教授, 1986 同教授, 1987 東文研教授, 1994 東文研所長及び東大評議員並びに東洋学文献センター長。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

中東地域に焦点を絞ってイスラーム世界の社会構造を歴史的に研究することが私の専門研究の内容である。そしてその研究成果をもとに、地球規模での人類史を語ろうと思っている。

1992・93年度では、90年度まで3か年にわたって実施された文部省科学研究費重点領域研究「イスラーム都市性」での研究成果をまとめた小論のいくつかを発表した。私の個人研究の基礎は、イスラームの予言者ムハンマド時代のアラブ社会の研究である。その研究をより深めるために、研究所の班研究として「ジャーヒリーヤからイスラームへ」を組織し、研究担当者、研究協力者、そしてより若い世代の研究者の参加を得て、定期的な研究会を主催してきた。その過程で私もいくつかの研究発表を行った。その一つは、ムハンマドはいかなる称号で統治したかを考察したもので、「予言者」ではなく「神の使徒」という称号が彼に統治者としての資格を与えていた、という結論を得た。また、ムハンマド没後のリッダ（イスラームからの離反）と呼ばれている歴史的な事象を伝える資料を分析し、資料を今日に残したムスリム歴史家たちは、ムハンマドの生前から彼の統治に反対する勢力が多方面にあったことを正直に伝えていることを指摘した。従来からの研究の成果と上記の結論を基に、イスラーム世界の社会構造に関するとりあえずの見通しも、いくつかの角度から述べてみた。

一方、地球規模での人類史の試みとして、1994年度から全面改定される高等学校の世界史の教科書の執筆に参加した。これは共同執筆の成果であ

## IX 所員の活動

るため、私の理解する世界史を全面的に展開できたわけではないが、執筆に際して、多様な地域の歴史を研究している専門家との対話を通して、多くの知見を得ることができた。また、イスラム世界を地球の一部としてとらえた「イスラム世界の歴史」を、放送大学で講義し、その教科書を出版した。

### 3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

放送大学 イスラム世界の歴史 1993年度, 新潟大学人文学部 東洋文化史 1992年, 岡山大学文学部 東洋史特講 1993年度, 東京大学文学部  
イスラム史概説 1992・93年度, 中央大学大学院文学研究科 西アジア史特講 1992年度, 西アジア史演習 1992年度, 東京大学大学院総合文化研究科 アジア地域文化相関論特殊研究 1992年度, アジア地域文化相関論 1993年度, 地域文化研究特別研究 1992・93年度, 東京大学大学院人文学科研究科 ムハンマド伝の研究 1992・93年度。

### 4. 学内行政事務分担 (1992. 4～1994. 3)

留学生交流委員 (1992年4月～1993年3月)。

### 5. 学外活動 (1992. 4～1994. 3)

日本オリエント学会 (理事・英文編集委員), 日本イスラム協会 (理事・編集委員), 日本中東学会 (理事), 史学会 (評議員), ナイル・エチピア学会 (評議員), 日本砂漠学会, 西南アジア研究会, 東洋史研究会, 東方学会, 山形史学会, 東北中国学会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員 (1992年4月～93年3月), 財団法人東洋文庫兼任研究員。

### 6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「アラブ戦士集団の成立」『歴史学研究』382 1972年；『ムハンマドとアラブ』1980；「ムハンマド伝の資料に関する覚え書きⅠ-Ⅱ」『山形大学史学論集』5・7 1985～87年；『メッカ-イスラムの都市社会』1991年。

### 7. 過去2年間 (1992. 4～1994. 3) の研究業績

『世界史 B (高校教科書)』(共著) 東京書籍 1993年；『イスラム世界の歴史 (放送大学教材)』放送大学教育振興会 1993年；『イスラムの都

市性』(学術新書)(共編著)日本学術振興会 1993年;「イスラム世界の理念」朝日新聞社編『古代史を語る』(朝日選書)朝日新聞社 1992年;「都市的に生きるということ」『都市史のガイドスコープ』(文化科学高等研究院 ISLA no. 3)文化科学高等研究院 1992年;「イスラームの共同体意識」『東洋学術研究』129 東洋哲学研究所 1992年;「イスラーム都市は」『学術月報』45-12 日本学術振興会 1992年;「イスラーム教の政治思想」堀敏一他編『中世史講座8 中世の宗教と学問』学生社 1993年;「私のイスラーム史学事始め(シリーズ・私の5冊の本)」『中東研究』377 1993年;「イスラムとは何か・経済発展に関連して」『アジア諸国の宗教・社会と経済発展に関する調査研究』アジア社会問題研究所 1993年;「神の使徒は予言者かムハンマドの場合」『史海』40 1993年;「巨大文明の継承者」「イスラーム国家の成立」佐藤次高・鈴木董共編『都市文明イスラーム』(講談社学術新書)講談社 1993年。

鎌田 繁 かまだ しげる

## 1. 略 歴

1951. 3 生, 1974 東大・文・宗教卒, 1976 東大大学院人文・宗教・修士課程修了, 同年 同博士課程入学, 1977 カナダ国・マックギル大留学(1979-80 1981), 1981 帰国, 1982 東大大学院博士課程退学, 同年 東大文学部助手, 1984 同退職, 同年 東京外大外国語学部非常勤講師, 同年 東文研助教授, 1989 カイロ出張, 1990 帰国。

## 2. 研究活動の概要・研究経過

人間は常に自分は一体何者であるかを問い続け, 人間とは何かの問いは, 人間の究極的運命, 救済の観念に結び付く形でさまざまな人間論を生み出す。この問いおよびその答えはいかに多様であれ, 常に問う者が置かれた文化的環境によって規定されてきた。イスラームという宗教体系のなかで人間はどのような自己理解を示しているか, それを探ろうというのが研究の出発点である。



## IX 所員の活動

人間の本来の姿の実現、あるいは救済の実現、は心のあり方をいかに認識しいかに変容させるかにかかっており、人間の宗教的「心」の分析に強い関心を抱いた。これは具体的には、イスラームの神秘家が内省の結果生み出した体験の深まりの記述を分析し整理することであった。このような関心から「サッラージュの神秘階梯説」(1977年)、“A Study of the Term *Sirr (Secret)* in Sufi *Latā'if* Theory” (1983年) が書かれた。この関心の延長上にあり、宇宙論的な位置づけをも考慮しようとしたものに『モッラー・サドラーの靈魂論』(1984年) や “The First Being: Intellect (*'aql/khiradh*) As the Link Between God's Command and Creation According to Abū Ya'qūb al-Sijistānī” (1988年) がある。

神秘主義的な主題を扱っている間に、比較的初期のスニーの神秘主義からイスラームの流れのなかでは傍流とされるシーア派における神秘思想に触れるようになり、やがて重点をそちらに移し、その代表的思想家のひとりであるモッラー・サドラーについていくつかの論文を書くようになった。上記のものほかに「モッラー・サドラーの輪廻 (*tanāsukh*) 思想」(1985年)、「モッラー・サドラーの『万有帰神論』訳注」(1986年) などがある。現在も引き続きこのシーア派神秘思想を主要な研究領域としている。しかしこの神秘思想もシーア派の知的環境の中で展開したものであり、それに対する目配りなくしては正しい理解に至らないと考え、シーア派の知的営為の総体を常に視野に入れるよう努力している。特にシーア思想の中核を形成するイマーム論を通して多彩なシーア思想を総合的に捉えられないかと模索しており、その基礎作業の一環として「イスラームにおける救済の前提」(1990年)、「アッラーマ・ヒッリーのイマーム論」(1992年)、「神秘主義とシーア・イマーム論の出会い」(1994年) を発表した。

### 3. 教育活動 (1992. 4～1994. 3)

東京大学人文系大学院宗教学宗教史学(イスラム学) イスラム思想文献講読 1992・93年度、一橋大学社会学部 宗教学及び宗教史 1992・93年度、信州大学教養部 地域研究 1992・93年度、上智大学外国語学部 イスラ

ム思想研究 (1) (2) 1992年度。

5. 学外活動 (1992. 4 ~1994. 3)

日本オリエント学会 (和文『オリエント』編集委員), 日本宗教学会 (評議員), 日本イスラム協会 (評議員), 宝積比較宗教・文化研究所 (理事), 宗教史学研究所。

6. 過去の主要業績 (1992. 3まで)

「サッラージュの神秘階梯説」『オリエント』20-1 1977年; 『モッラー・サドラーの靈魂論—『真知をもつ者たちの靈薬』校訂・訳注並びに序説』1984年; 「モッラー・サドラーの『万有帰神論』訳注」『東文研紀要』100 1986年; “The First Being: Intellect (*'aql/khiradh*) As the Link Between God's Command and Creation According to Abū Ya'qūb al-Sijistānī” 『東文研紀要』106 1988; 「アッラーマ・ヒッリーのイマーム論—『意図の解明・教養学綱要注釈』第五章訳注」『東文研紀要』118 1992年。

7. 過去2年間 (1992. 4 ~1994. 3) の研究業績

『超越と神秘—中国・インド・イスラームの思想世界』(森秀樹氏と共編著) 大明堂 1994年; 「イスラームにおける権威の構造」脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学』第4巻(権威の構築と破壊) 東京大学出版会 1992年; 「イスラームにおける他宗教の理解—イブン・ハズムの創世記批判」竹内整一・月本昭男編『宗教と寛容—異宗教・異文化の対話に向けて』大明堂 1993年; 「新イスラーム講座2 ハディース」『イスラム世界』39・40 1993年; 「イスラームにおける内面への沈潜—神秘家クシャイリーの神体験」『季刊AZ』30(ユング 寓話の心理学) 1994年; 「神秘主義とシーア・イマーム論の出会い—ファイド・カーシャーニーの完全人間論」鎌田繁・森秀樹編『超越と神秘—中国・インド・イスラームの思想世界』大明堂 1994年; 「イスラームと輪廻」宝積比較宗教文化研究所『宝積』3 1993年; 「イスラームの理解のために」『一二イマーム派』『世界「宗教」総覧』歴史読本特別増刊事典シリーズ第20号 新人物往来社

## IX 所員の活動

1993年；[書評]「Lazarus-Yafeh, Hava, *Interwined Worlds: Medieval Islam and Bible Criticism*, Princeton, 1992」『オリエント』35-2 1992年。

林 佳世子 はやし かよこ (1993. 4 配置換)

### 1. 略 歴

1958. 11生, 1981 お茶大・文教育学部・史学卒, 1984 同大学院人文科学・史学・修士課程修了, 同年 東大大学院人文・東洋史・博士課程入学, 1984 トルコ国・イスタンブル大留学 (1986まで), 1988 東大大学院博士課程退学, 同年 東文研助手, 1993 東京外大専任講師。

### 2. 研究活動の概要・研究経過

イスラム世界の都市を, その空間構造と社会システムの両面で特徴づける「ワクフ制度 (宗教寄進制度)」研究を主要なテーマとし, 具体的な対象地域としては, 主に, オスマン帝国時代のイスタンブルを扱っている。

都市空間とワクフ制度の関わりでは, 都市の建築事業に果たしたワクフ制度の役割の解明が重要なテーマのひとつである。その具体例を明らかにする目的から, イスタンブルの再建過程を「15世紀後半のイスタンブル」(1982年)に整理した。その後, イスタンブルへの留学の機会を得(1984~86年), トルコ共和国総理府文書局やトプカプ宮殿文書館をはじめとするアーカイヴでワクフ文書などの未刊行の文書資料を収集することができた。それをもとに, イスタンブル再建の基本史料であるメフメト2世のワクフ文書群に関して, その成立過程を明らかにする研究論文を発表している(1988年)。

都市の社会システムとしてのワクフ制度の運用の実態に関しては, まず, 代表的なワクフ施設であるイマーレット (救貧施設) の運営について, 具体的な情報を整理した(1989年)。その後, モスクを中心とする大規模な宗教施設複合体の運営について, 1990年の在外研究, 1991年の文部省国際学術研究による海外調査の期間中にイスタンブルの諸アーカイヴにおいて取

集しえたワクフ収支簿台帳類をもとに、整理をすすめている。また、ワクフ寄進という行為の多様性と都市民のメンタリティーの一端を明らかにするという目的から、都市民が住宅をワクフ寄進する事例について検討を加えた(1992年)。16世紀イスタンブルで展開したワクフ制度の全体像についての論考を発表した(1992年)。

1989・91・92年には、文部省国際学術研究により、おもに中東地域の諸都市を中心として、都市の空間構造に関して調査を行う機会を与えられた。こうした現地調査と文書研究をあわせ、「ワクフ制度」の実態の解明を軸に、オスマン朝都市に共通する特徴を明らかにしていくことを、課題とし研究を行った。

5. 学外活動(1992. 4～1994. 3)

日本中東学会, 日本オリエント学会, 史学会。

6. 過去の主要業績(1992. 3まで)

「15世紀後半のイスタンブル——メフメト2世の復興策を中心に」『お茶の水史学』25 1982年；「メフメト2世のワクフ文書群の成立」『日本中東学会年報』3 (2) 1988年；「イスラム都市の慈善施設『イマーレット』の生活」『東洋文化』69 1989年；「トルコ」羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究—歴史と展望』東京大学出版会 1991年；「16世紀イスタンブルの住宅ワクフ」『東文研紀要』118 1992年。

7. 過去2年間(1992. 4～1994. 3)の研究業績

“The Vakıf Institution in 16th-Century Istanbul: An Analysis of the Vakıf Survey Register of 1546,” *The Memoirs of the Toyo Bunko* 50 1992.

## X 附属東洋学文献センター

東洋文化研究所附属東洋学文献センターは、東洋学に関する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サービスを目的として1966年(昭和41年)に設置された。以来、アジア研究のための基本資料(中国・朝鮮関係図書、中国新聞・雑誌の影印本類、アラビア語写本蒐書「ダイバーコレクション」等アジア諸地域の文献、新聞)の収集を積極的に行い、これと並行して『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』、1993年度までに合計83輯を数える「東洋学文献センター叢刊」等のドキュメンテーション・サービス活動を進めてきた。その他、毎年全国各地の漢籍担当職員に対して研修を実施し、漢籍所在調査、朝鮮関係図書所在調査、漢籍貴重書複本化作業等を行っている。

しかし近年、東洋学文献センター(以下、本文献センターと略す)の情報サービス活動に対する要請はますます多様化しており、国内・国外におけるアジア研究資料の所在調査、非ラテン文字言語資料の冊子体目録の作成とともに、データベース化を促進してサービスの飛躍的拡充を図ることが求められている。従って、本文献センターは現在の事業を強力に推進すると同時に、東洋文化研究所が所蔵する貴重な資料や文献情報を出来るだけ利用しやすい形で提供できるよう、情報検索システムの活用と長期的展望に基く資料調査を遂行する所存である。以下に本文献センターの現状と展望を述べる。

### 1. 資料収集

東洋学文献センターは設立当初から近・現代中国書、前近代中国書および近現代朝鮮関係文献の資料収集と整理を進めており、当研究所未収の漢籍で他機関が所蔵する貴重書は、これをマイクロフィルムにより収集している。

また、1981年度以来、清末・民国初年に刊行された新聞・雑誌の影印本類を収集し、閲覧に供している。さらに、近年広くアジア全域の現代社会研究が要請されているのにかんがみ、1989年度以来アジア各地の新聞(マイクロフィル

ムを含め、58紙)を収集し、閲覧に供している。

その他、1987年度にはダイバー博士旧蔵のアラビア語写本蒐書を「大型コレクション」として購入し、その目録を刊行した。

## 2. ドキュメンテーション・サービス

### 1) 東洋学文献センター叢刊

広くアジア研究のためのレファレンス(書誌・目録・解題・索引・資料集等)を編集し刊行している。1993年度末までに叢刊64輯、叢刊別輯19輯、合計83輯を数えることとなった(本書201頁以降の既刊リスト参照)。参考図書的需求は近年ますます増大しており、引き続き『朝鮮研究文献目録改訂増補版』『販書偶記刊行者名索引』等を刊行する予定である。

### 2) 東洋文化研究所所蔵現代中国書データベース

本研究所は、30万冊を超える漢籍並びに現代中国書を所蔵しており、漢籍については、『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』(『本文篇』1973年、『索引篇』1975年。補訂合冊縮印版1981年)を刊行した。しかし、4万点を超えかつ年間5千点以上増加する現代中国書については冊子目録がないため、「東洋文化研究所所蔵現代中国書データベース」(民国以来1990年度まで約3万2千点)の入力作業を開始した。1994年度末には、データファイル並びに検索システムを作成する予定である。

### 3) 朝鮮関係図書所在調査

本文献センターは、かつて『朝鮮研究文献目録』(単行書篇、論文・記事篇)を文献センター叢刊の一環として刊行したが、これは所収文献の所在目録ではなかったため、当目録の利用者から所在についての問い合わせがあっても、十分に対応できなかつた。朝鮮関係図書目録および未収録の文献目録への要請に応えるため、1994年度は改訂増補版の原稿完成をめざしている。

### 4) 『センター通信』

本文献センターの活動報告、情報サービスに関する各方面からの提言などを中心に編集し、1993年度末までに34号を刊行した。

## X 附属東洋学文献センター

### 3. 漢籍整理促進事業および漢籍所在調査

1980年度から毎年漢籍整理長期研修を実施している。諸大学・公立図書館の漢籍整理担当職員に対して、講義と実習の両面にわたる個別指導を行い、漢籍整理の専門的知識と技能の向上をめざすもので、1993年度までに55機関71名の受講者があった。漢籍所在調査は、研修受講者が受講後その所属図書館の漢籍整理作業を行う際、要請により支援する形でリンクしており、1990年度以来、広島大学附属図書館所蔵斯波文庫の調査と目録原稿作成を実施し、1993年度に最終的な調査を行った。現在、広島大学において、この調査を基礎に蔵書目録を編集中である。

なお、上記2. 2) における現代中国書データベース化も、全国総合分類目録の一環をになう漢籍所在調査として作業を行っている。

### 4. 漢籍貴重書複本化

本研究所の漢籍の中には宋刊本・明刊本・朝鮮刊本等の貴重書が多数含まれている。このため、学内外のみならず、海外からも多数の利用者があり、図書の損耗も少なくない。貴重書は、文化財としても緊急に保全措置を取る必要に迫られていたが、1989年度から予算が配当され複本化を開始した。1992・93年度は、研究所所蔵漢籍の根幹をなす大木文庫を中心に実施した。他方、複写技術の進歩により、諸研究機関からの複写依頼も増加しており、利用の便宜と原書の保全のため、ひき続き複本化を行う。

### 5. 今後の展望

本文献センターは、東洋文化研究所の全面的な協力を得て目録編纂事業を電算化し、諸研究機関・研究者の共同利用に供するとともに、文献所在調査を粘り強く継続し、アジア研究資料のネットワーク作りを推進したい。具体的には、現在進行中の現代中国書データベース、朝鮮関係図書所在目録をはじめ、アジア研究の参考図書を作成し、それらを大学間ネットワークシステムによって公開する。他方、本研究所の海外研究基地構想の発展にともない、香港、中国、シンガポール等の研究機関の蔵書調査を行い、わが国における資料収集を長期的展望のもとに行うことに寄与したい。

東洋学文献センター叢刊既刊一覧（\*在庫なし）

- \* 第1輯 東洋文化研究所東洋学文献センター 新収図書目録（昭和41年度）  
1968
- \* 第2輯 清代地方劇資料集（一） 1968
- \* 第3輯 清代地方劇資料集（二） 1968
- \* 第4輯 周揚著訳論文・周揚批判文献目録 1969
- \* 第5輯 郁達夫資料 1969
- \* 第6輯 東洋文化研究所東洋学文献センター 新収図書目録（昭和42・43年  
度） 1970
- \* 第7輯 朝鮮研究文献目録 単行書篇（上） 1970
- \* 第8輯 朝鮮研究文献目録 単行書篇（中） 1970
- \* 第9輯 朝鮮研究文献目録 単行書篇（下） 1970
- \* 第10輯 李大釗文献目録 1970
- \* 第11輯 明刊元雜劇西廂記目録 1970
- \* 第12輯 朝鮮研究文献目録 単行書篇・編著者名索引 1970
- \* 第13輯 魯迅全集注釈索引 1971
- \* 第14輯 1930年代中国文芸雑誌（一） 1971
- \* 第15輯 朝鮮研究文献目録 論文・記事篇（I） 1972
- \* 第16輯 朝鮮研究文献目録 論文・記事篇（II） 1972
- \* 第17輯 朝鮮研究文献目録 論文・記事篇（III） 1972
- \* 第18輯 郁達夫資料補篇（上） 1973
- \* 第19輯 切韻残卷諸本補正 1973
- \* 第20輯 目録学 1973
- 第21輯 花間集索引 1974
- 第22輯 郁達夫資料補篇（下） 1974
- \* 第23輯 仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集（一） 1975
- 第24輯 江西蘇区文学運動資料集 1976
- \* 第25輯 仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集（二） 1976



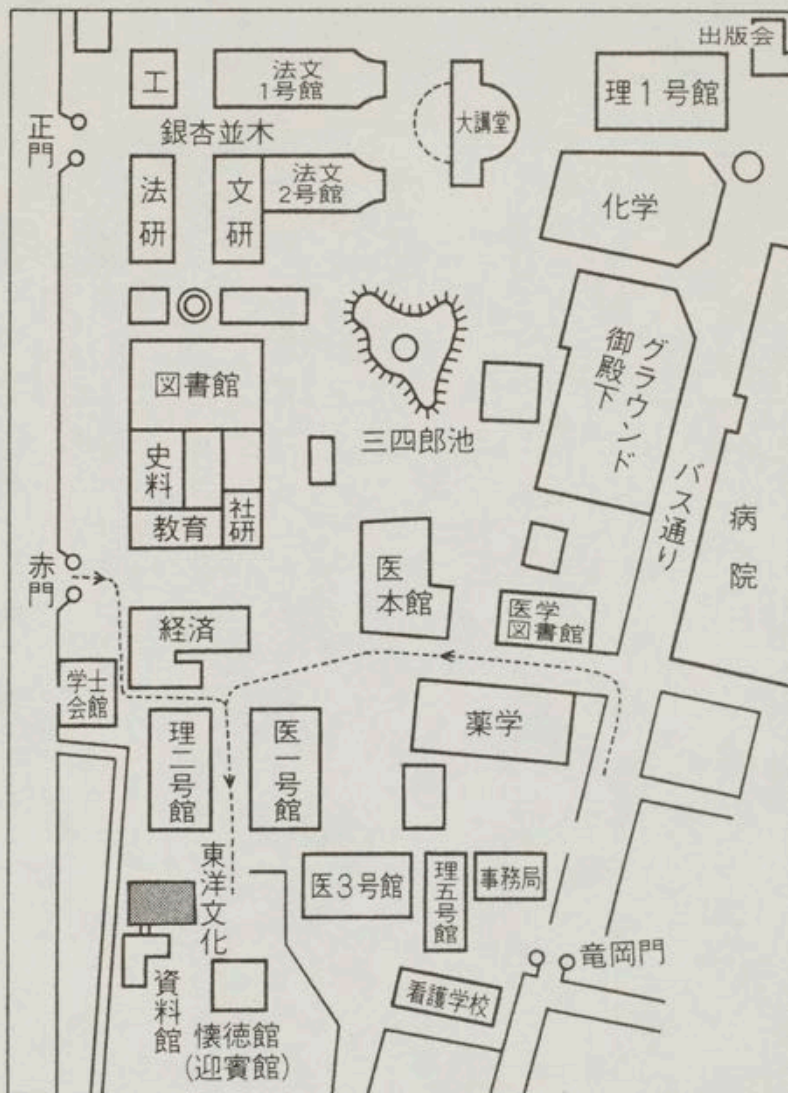
X 附属東洋学文献センター

- 第26輯 民国以来人名字号別名索引 1977
- 第27輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目  
(一) 1978
- 第28輯 仁井田陸博士輯 北京工商ギルド資料集 (三) 1978
- 第29輯 中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録 1978
- 第30輯 仁井田陸博士輯 北京工商ギルド資料集 (四) 1979
- 第31輯 儀禮疏攷正 (上) 1979
- 第32輯 儀禮疏攷正 (下) 1979
- 第33輯 仁井田陸博士輯 北京工商ギルド資料集 (五) 1980
- 第34輯 小説月報 (1920-1931) 総目録 1980
- 第35輯 コミンテルン定期刊行物 中国関係論説・記事索引 1981
- 第36輯 魯迅文言語彙索引 1981
- 第37輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目  
(二) 1981
- 第38輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目  
(三) 1982
- 第39輯 仁井田陸博士輯 北京工商ギルド資料集 (六) 1983
- \* 第40輯 東洋文化研究所所蔵 中国土地文書目録・解説 (上) 1983
- 第41輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雑誌記事総目  
(四) 1983
- 第42輯 校合本 大越史記全書 (上) 1984
- 第43輯 『植民地雑誌』 (*Koloniaal Tijdschrift*) 所収論文目録 1984
- 第44輯 校合本 大越史記全書 (中) 1985
- 第45輯 江西蘇区紅色戲劇資料集 1985
- 第46輯 宋之間詩索引 1985
- 第47輯 校合本 大越史記全書 (下) 1986
- \* 第48輯 東洋文化研究所所蔵 中国土地文書目録・解説 (下) 1986
- \* 第49輯 許舒博士所輯 廣東宗族契拋彙録 (上) 1987

- 第50輯 沈佺期詩索引 1987
- 第51輯 中華人民共和國・朝鮮民主主義人民共和國 職官歷任表 1987
- 第52輯 韓国政治エリート研究資料——職位と略歴 1987
- 第53輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事総目  
(五) 1988
- \* 第54輯 許舒博士所輯 廣東宗族契拋彙録(下) 1988
- 第55輯 南岳思大禪師立誓願文索引——六朝隋唐宗教・思想資料 1988
- 第56輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事総目  
(六) 1988
- 第57輯 郁達夫資料総目録附年譜(上) 1989
- 第58輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事総目  
(七) 1989
- 第59輯 郁達夫資料総目録附年譜(下) 1990
- 第60輯 山西票号資料 書簡篇(一) 1990
- 第61輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事総目  
(八) 1990
- 第62輯 自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事総目  
(九) 1991
- 第63輯 『自一九二七年至一九三七年 日本現存短期零本中国雜誌記事総目』  
収載雜誌名索引 1992
- 第64輯 許寿裳日記 (自一九四〇年八月一日至一九四八年二月一八日)  
1993
- \* 別輯 1 東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録書名人名索引・京都大学人文  
科学研究所漢籍分類目録書名人名通検合併 四角號碼檢字表 1975
- \* 別輯 2 海外所在中国絵画目録(アメリカ・カナダ編) 1977
- \* 別輯 3 海外所在中国絵画目録(東南アジア・ヨーロッパ編) 1981
- \* 別輯 4 日本所在中国絵画目録(寺院編) 1982

X 附属東洋学文献センター

- 別輯5 LABRANG 李安宅の調査報告 1982
- \*別輯6 日本所在中国絵画目録 (博物館編) 1982
- \*別輯7 日本所在中国絵画目録 (個人蒐集編) 1983
- 別輯8 中国経済関係雑誌記事総目録(一) — 『中外経済週刊』『経済半月刊』  
『工商半月刊』 1983
- 別輯9 孟郊詩索引 (上) 1984
- 別輯10 孟郊詩索引 (下) 1984
- 別輯11 中国経済関係雑誌記事総目録 (二) — 『国際貿易導報』 1985
- 別輯12 中国経済関係雑誌記事総目録 (三) — 『中行月刊』 1985
- 別輯13 『内務行政雑誌』 所収論文・記事目録 (A Catalogue of the Articles  
in *Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur*) 1985
- 別輯14 中国経済関係雑誌記事総目録 (四) — 『銀行週報』 (上) 1987
- 別輯15 春秋晋国『侯馬盟書』 字体通覧 — 山西省出土文字資料 1988
- 別輯16 中国経済関係雑誌記事総目録 (五) — 『銀行週報』 (下) 1989
- 別輯17 海外所在中国絵画目録 改訂増補版 (ヨーロッパ編) 1992
- 別輯18 海外所在中国絵画目録 改訂増補版 (アメリカ・カナダ編 上  
本文編) 1994
- 別輯19 海外所在中国絵画目録 改訂増補版 (アメリカ・カナダ編 下  
索引編) 1994



平成6年7月20日発行

東京大学東洋文化研究所

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

電話 (03) 3812-2111 内線5833

ファクシミリ (03) 5684-5964

(印刷 厚徳社)